

愛がつて下さいまし、私の身の潔白は、明さんと呼んで、も立派に證據を立てて見せますから、何卒、ねえ、貴方……」

剛「そんな女房の機嫌を取つて暮すやうな男が欲しけりや、矢張明なんかの處へても嫁つた方が善いのだ、そんな女はこの先、まだ、何んな不名譽な事を私に仕向けるかも知れない、私にはとても行末添遂ける見込がないから、もう汝との縁はこれ限りだと思へ」

藤子「私は詰まらない者で、貴方の様な豪い人を夫に持つのは器量不相應では、ムいませうが一旦夫婦になつて守雄といふ可愛い子まで出て来る中で、ムいませう……これからはもう決して貴方の御迷惑になる様な真似は致しません、ハイ決して致しませんから何卒これまで通り……」

剛「貴方に見離されたら私はもう死んで了ひます……」

剛「死ぬなんか口で云ふ奴に死んだ例があるもんか、卑怯者はつい容易に死ぬるものぢやアない……」

藤子「否、貴方に見捨られたら私は眞實に死んで了ひます」

○書生川村、郵便一束を持來つて退く、

剛「何んだ、小田川明から手紙を寄越した」

藤子「エ、明さんから……それぢやア大方、あの、新聞で、私の濡れ衣を着て難儀してるのを御覽なつて、辯解の御手紙なんてムいませう、貴方、眞實にこれ、疑を晴して下さいまし」

剛「……見る、眉を上げ、何んだ……昨夜は偶とした心の迷ひより、藤子様と不義の語ひ……」

藤子「エッ……讀み違ひなつてるのでせう」

剛「……不義の語らひ致し候へ共、つくづく良心に咎められ、今更悔悟……今更悔悟……」

藤子「まア、何んてそんな根も葉もない事を……明さんは氣でも狂つたのでせうか」

剛「フム、氣の狂つた者が自分の罪を懺悔して寄越すと思ふか、まアよく聞けッ……誠に、貴殿は素より伯父伯母へ對しても逢はず顔無之、天

地身を容るゝに處なきやう覺え申候間、重々の大罪、御詫の爲に小生は直に海に投身致し、底の藻屑と相果て可申候、乍憚、藤子様へも速に懺悔致さるゝやう、小生冥途より祈り居候旨御申聞け被下度、この上のお情にはせめて手づから一遍の御回向を頼み入るとの事、乍恐縮御傳言被下候はゞ今死んで行く身の本懐至極に存じ候……さア之を見ろ、……不埒な奴め……これでも嘘だとは云はせんぞ」手紙を投げ附ける、

藤子「エ、……まア何うしてこんな拵事を、……間違つて居ます、無實な事でムいます、明さんが全く私に覺えもないぬれ衣を着せるのでムいます」

剛「馬鹿を云ふな、不義の相手が現在、自分で罪を後悔して、死んで私へ對して詫をするといふこの手紙だ、嘘に死ぬ奴があると思ふか、汝はこれでもまだ彼是と云張つて私を欺さうとするのか、見かけによらぬ大膽不敵の毒婦だぞ」

藤子「わ、私は口惜うムいます……口惜うムいます、そんな覺はありません」

……私の心に疚しい事はありません、ハイ……私は潔白でムいます……」

剛「フン、泥棒でも自分では正直だと云ふもんだ」

藤子「私は潔白でムいます……明さんが私にぬれ衣を着せるのでムいますハイ、私は飽まで潔白です、藤は貴方より外、夫と侍くものはありません」

剛「フン、摘み食した口を拭つて、三度の御飯より外戴きませんよと云つた處が品行の善い嫁だとは云はれんど、姦通した女が潔白なら廓の女郎は皆未通娘だ、馬鹿者めが」
フン

守雄「駈入り」お父さん……お父さん、お母さんを何故お叱りなさるの、勘忍して頂戴なねえ、お母さんは泣いてつらしやるんだもの、ねえ、お父さんてば、お母さんが可愛さうだから……」

藤子「オ、守雄、お母さんは鎌倉へ行くつても、明さんと悪い事をした覺はないのだからお父さんに然う云つておくれ、汝も知つてる事だものね……」

「……」
守「お父さん、お母さんが悪くはないよ、ねえお父さん、僕も一緒に遊びに行つたんだから、お母さんを叱るのはもう廢止して頂戴よ、ねえ、お父さん……」

剛「オ、守雄、もう此人はお母さんでも何んでもないから然う思へ」
守「だつて、そんな事……ねえ、お父さん、もう怒るのは廢止して頂戴よ、僕が謝罪するから……ねえ、お父さん……」

藤王「人の疑ひを受けまい爲めに、この子を連れて行つたのでムいすもの、貴方もあまり邪推が過ぎますよ」

剛「エ、……己が邪推なんかするものか、相手がもう自首して来たんだから證據は明白だ、何んの今時の婦女子の不品行なんか、珍らしくもない事だ、こんな事で屈托するやうな氣の小さい己ではない……ア、行つて東郷君の死顔に、最後の暇乞でもしてやろうか……守雄、汚れた女の傍に居るな、さアお父さんと一緒に來い」つと起つて追従り、

藤王「貴君さア、お待ちなすつて下さいまし……私は何うしても身に覺えない事に、貴方から愛憎を盡かされる譯はありません……私の體は飽迄も潔白でムいます」

剛「フン、體が飽迄潔白で、心が飽迄も汚れてゐるのか、もう云譯には及ばぬぞ」

守「お父さん、もうお母さんを堪忍して上げて下さいな、僕がこれからは勉強して、悪戯なんかしないから……お母さんはあんなに泣いてらつしやるんだもの」

剛「エ、……泣く奴は泣かして置け、汝はお父さんと一緒に來い、もう其處の奴はお母さんではないんだと云ふに」

守「だつて、お父さん……それでは僕が困るもの……」
剛「エ、勝手にしろッ」

藤王「さア一寸と待つて下さいまし」
剛「うるさい、離縁した奴に用はないぞ」と突放して入る

守雄「お母さん、もう泣かなくても善いよ、お父さんは怒りつほうだものねえ……………」

藤子「お母さんはもう死んで了ひますよ……………」

守「死んぢやアいけない／＼お母さん死んぢやアいけないよ」

藤子「……………」身に覺えもない不義密通を云ひかけられて、彼アしてお父さんからは愛憎を盡かされるし、もう世間へは顔出もならず……………明さんも明さん、こんな手紙を寄越して置いて死んで了ふなんて、戀の叶はぬ遺恨、遺恨で、私へ怨を晴らす氣かも知れないが、あんまり酷い、あんまり執念深い事をするんだねえ」

守「明さんが死んだのかい、眞實に……………」お母さんもうそんなに泣かなくて善いよ、ね、心配しなくてもいいよ……………」

藤子「ア、汝は眞實に佛様だねえ……………」お母さんは身に些とも覺えのない事で、離縁される所以はないけれども、お父さんが一旦云ひ出したら後へは引かぬ御氣象だし、彼方からも此方からも何んだか私一人が敵と現

はれてゐる様な氣がするからもう何處にも私の立瀬はありやアしない、死ぬより外……………死んで身の潔白の證據を立てるより外、思案も何も盡さて了つた、ア、口惜しい……………ア、口惜しい、こんなに口惜しい事はない」

守「お母さんてば、もう泣かなくても善いよ、死んだり何んかしては僕が困るから、ねえお母さん、僕がお父さんへ謝まるから、ね心配しなくても善いよ」

藤子「オ、……………可愛い汝を一人置いて、お母さんは死んでも心が残りますよ……………」

守「僕が祖父様に然う云つて、お父さんを叱つて貰ふからね、お母さん、そしたらお父さんはもう怒らないよ」

藤子「可愛い汝があつては、お母さんは死んでも死切れないよ」

守「死んぢやア否……………そんな事をしなくても善いんだもの、お父さんは怒り坊だからね、お母さん、祖父さんに叱つて貰つたら善いわ……………」

藤子「汝もう可愛い事を云つておくれでないよ……………」お母さんは……………」お母さん

んは胸が裂けるやうなもの……」

○藤子の父、岩太郎入来る、

藤子ア、お父さん、善く来て下さいましたのねえ……」

守祖父様、お父さんがねえ、お母さんを怒り附けるんだもの、僕困つち

やたの、お父さんを叱つてくれるとい、けれどね……」

藤子お父さん、私はこんな口惜い事はムいません、身に覚えのないぬれ

衣を着せられて姦通なんて、聞くも汚らはしい疑を懸けられたのでムい

ます、お父さん私も何うしたら善ムいませう、眞實に口惜うムいます

もの」

岩イヤ、私もその事で、世間の評判も大分暗ましい様だし、氣懸てなら
ないから何時汝が歸るか、それ許待つてゐて、鎌倉へ電報も打つて見
たが行違つたか返事も来ず、此邸へももうこれにて三度目だ、……藤、汝
もあんまり我儘が過ぎやうぜ」

藤お父さん、貴方までそんな事を仰やるのでムいませうか、私は些とも身

に覚えのない事でムいませうもの」

岩覚えがないとは云はせんぞ、私が一寸と留守した際に、汝は自分から

好き好んで明と一緒に鎌倉へ行つたんださうな、夫の留守に邸宅を明け

て、それで妻たる者の役目が済むと思ふか」

藤それは私が悪うムいましたけれども……」

岩それはまだしも泊り込んで歸るといふのは一體何事だ、嫌疑をかけら

れるのは無理もない、剛が立腹したのは尤だと思ふよ……親の私でさへ

腹が立つ……だから常平常云はん事かい、剛は云は、婿の様な者だけれ

ど、汝には過ぎた器量のある者、苟めにも馬鹿にするやうな素振があつ

てはならんから、誰んだ上にも善く謹んで仕へて行けと、夫に汝は大そ

れた、明なんかと彼是云ふ噂を立てられるとは何んたる情ない事だろ、

大きな名譽を持つてる丈汚れ目も一層大きに目立つて来る、司法大臣の

妻が姦通したなんて云ふ世評が立つと剛がいかにも間の抜けた、愚圖な

男と世間からば見くびられる、同僚の大臣仲間からも自づと輕蔑されて

来やうし、汝はまア何んとして申譯をするつもりか」
 藤子「お父さん、貴方までまア眞實に、私を疑つてらつしやるのでムい
 すか、私はそんな汚ららしい事は身に些とも覺はムいませぬ、此の子を
 連れて鎌倉迄、叔母さんの病氣見舞に行へたといふ丈ですもの、それを
 まア姦通の何んのと、こんな口惜い事はムいませぬ」
 岩「それを口惜がる程なら始めから最少つと氣を附けてゐたら善いのだ、
 鶴が立つても畑だと云つて騒ぐ世の中、何事も輕卒な事をするのが失策
 の元になるので、嫌疑を受けるのは畢竟受るやうな事をするものが悪い、
 もう分別の無い歳でもあるまいし、こんな大きな子まで設けてゐる人が、
 後考へないと云つてもあんまりだと思ふ、我娘ながら汝の肩は持たれ
 ない、私は剛さんが立腹するのも尤だと思ふてゐるよ」
 藤子「けれどもお父さん……そりやア私の考もあんまり淺果敢ではムいま
 したらうけれども、剛さんは私を離縁すると云つて入らつしやるのです
 もの、罪も咎もない者を私はそんな事をされる理由がありません、あん

まりではムいませぬか」
 岩「剛が汝を離縁する？……そんな事を云ひ出したのか……彼の身になつ
 て見ると、萬更無理でもない、一旦云出しからにや、理が非でも押通さ
 ねば置かぬあの人の氣象だからこれは随分事が面倒になつて来たが、汝
 の身の證明が立つた日にや、子まである中だもの、然う無理な事も得云
 ふまい……この上は明を呼んで、親子夫婦一坐に集つて篤と話を附ける
 より外に仕方がない」
 藤子「お父さん……その明さんが……口惜うムいます……」
 守雄「お母さん氣遣ふといけな、祖父様、僕が困る、僕は困つて了ふよ」
 岩「、汝は心配せんでも善い、心配せんでも善い……此處に、明から
 手紙が来てゐるのではないか、何んと云つて寄越してゐるのか……」半は
 讀みかけて「……」これはまア、汝はまア情ない事をして
 くれたのう……」
 藤子「お父さん、明さんは……明さんはそんな些つとも身に覺のない事を

云つて寄越しました、新聞へ出したのも彼人かも知れませんが、戀の叶はぬ怨みだと云つてあんまり、酷い仕打ではありませんか、これが人間の仕業だと思へませうかねえ」

母さん、泣かなくても善いよ、お母さん……」

岩何？それでは、あの明が遣返返しにした事だと云ふのか……それにしてもあんまり思切つた所置をしたものぢやアないか……藤、汝眞實に私に云つてくれ、親に隠立するには及ばぬ、何も彼も私に打明けてくれ」

藤子お父さん、貴方は未だ私を疑つてらつしやるのですか……お情なうムいますよ……」

岩私は汝の親だ、切つても切れぬ親子ぢや、息子が死んでからは、汝より外には一人も子のない私等だから汝の爲なら命でも惜くはない、その親に隠立する事は要らん……何も彼も云つてくれ」

藤子お父さん……私は潔白でムいます、私は決して明さんなんかと、そんな覺は毛筋程もムいませんよ」

岩ウム……然う云へば達つて汝を疑ふ譯にも行かん……儘と左様だらうな……それぢや私は尙剛とも相談した上、あの、明めを糾明して、新聞へ投書した事も何も彼もすつかり白状させてやるからア汝は安心して待つてゐるが善い」

藤子だつてお父さん、明さんは……その手紙の端にも、自分は死ぬと書いてあります、御詫の爲に海へ入つて死ぬと書いてありますもの……」

岩エ、死ぬ……成程死ぬ……死んでお詫をするよと云ふのか……エツ、藤、汝は親まで欺さうといふ氣か、情ない心になつて呉れたのう……」

藤子否え、お父さん、それはあんまりお情無うムいます、明さんは死んでまで私に怨を返さうとなさるんですもの、お父さんにまでそんなに取られては私はもう死んで了つて、身の潔白を證明立するより外ありません」

岩お母さん死んでお忌だ、忌だ、祖父様お母さんを叱るのは廢止して頂戴よ……」

岩「私は成丈、汝を疑ひ度くはないけれども、そんなに嘘や申談で人間は死ねるものではないから、この手紙が何うも心に懸つてならんのだや……死ぬ……死ぬと書てあるんだもの……それにしても明が眞實に死んで了つたのなら詮議をする手筈も切れて了つたのだ……ア、困つた事になつたなア……」

藤「子もうくこんな悪名を受けて……私は此世に生きちやアゐられません」

守「お母さん、死んでは思だつて云ふに……」

○書生川村出来り「鎌倉から電報が参りました」

岩「何に……鎌倉から……アキラユクエシレマトツケイヘユカヌカヘンジマッ……」

藤「それぢやア眞實に死んで了つたのでせうねえ」

岩「兎に角家出はしたものと見えるが……藤子、まアく短氣な事をしてはならんぞ、決して短氣を出してはならんぞ……是から私は兎に角剛に

達つて来るからまア氣を落着けて、寝んでなとるが善し」

守「祖父様、もう歸るの？」

岩「オ、直と又戻つて来るからお母さんへ氣を附けてお上げよ」

藤「お父さん……」

岩「何か用かい……」

藤「否え……何んでもありませんよ」

岩「それぢや一寸と行つて来るからいゝんな事を氣に懸けずと寝んで待つて居れ」と立かゝるを後より又、

藤「お父さん……」

岩「何か用かい……」

藤「何、強いて用はありませんが……何卒お道を氣を附けて……お身體を大切になさつて……」

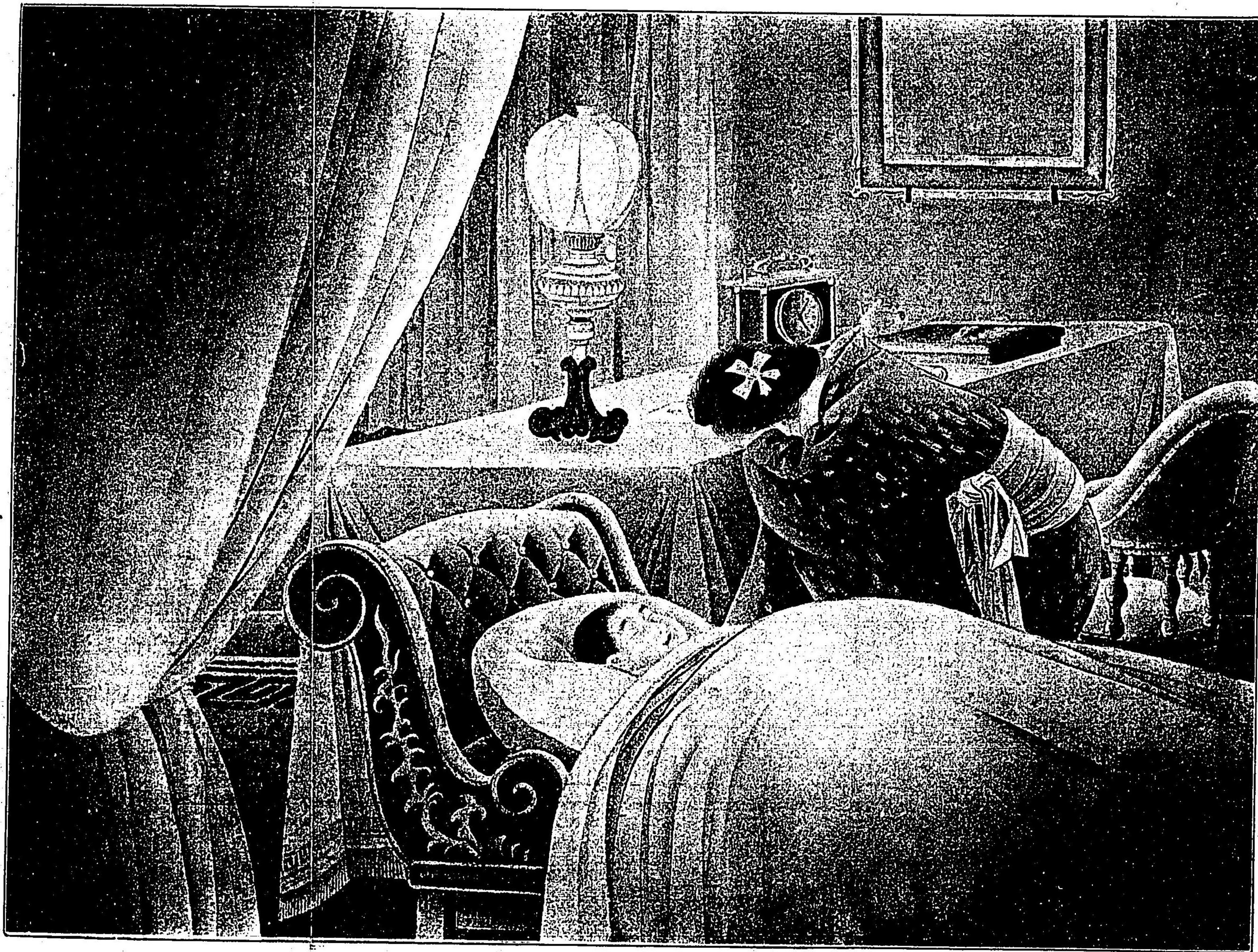
岩「何を云ふのだい……直と歸つて来るから汝こそ安心して寝んで居れ、善いかい、決して氣遣するには及ばんからの」

「藤子……」
「お母さん、泣いては思だつて云ふにねえ」

(其二) 藤子自害の場

夜半のニコライの鐘、藤子悶えながら寢臺より起上る

「そりやア私にも落度はありません、我儘が過ぎたかも知れませんが、気が過ぎたかも知れませんが剛さんも剛さん、十年連れ添ふ女房に始めから斯うした譯と唯つた一口、打明けて云つて下さらないとはあんまりお情ないではありませんか、……現在夫の貴方にまであられない事を疑はれて、離縁なんて苟且にもそんな事を云出して下さるうとはあんまりてゝいます、あんまりてゝいます……明さんも明さん、私は怨みますよ、仕返に事を缺いて、こんな姦通なんて、汚ららしい名を着せて……それで戀と云はれますか、それで貴方は私を死ぬ迄戀しいと思つてたと



云はれませうか、あんまりです、あんまり執拗いではありませんか……
 けれどもねえ、貴方ももう海の中へ身を投げて死んでお了ひなすつたの
 せうが、それも一圖に私を戀しいと思詰めての御覺悟かと思へば貴方に
 對しても私は眞實に罪を造りましたのねえ、綾江さんとやらも私を怨ん
 でゐなさるのだらうし、……ア、人の怨が皆身に酬うて來たのか、も
 うもう私は死んで了ふより外仕方がない……」

守雄の寝顔を見て

「眞實にすや」と善く眠入つてゐるのねえ、罪も咎もなく、何んにも
 知らないで夢でも見てゐるのだらうが……守雄さん、汝明朝、眼を醒し
 て見たらもうお母さんは此世に居ないのだよ、嗚、汝悲む事だらう、お
 母さんくって泣く事つたらうねえ……明日の晩からは誰も抱いて寝てや
 るものはないのねえ……」

守雄寢言「お母ちゃんく泣いては忌だよ、僕困るから泣いちやア忌だ
 ……」

藤子「オ、……寝言に迄お母さんの事を氣遣つてゐてくれるのかい、汝を
 残して置いてお母さんは眞實に死んでも思ひが残ります……ア、口惜し
 いねえ、こんな濡れ衣を着せられて世間へは顔出もならず……ア、汝ま
 て學校でお母さんが姦通したの不義したのと、爪弾を受けやしないかね
 え……」

守「母ちゃん、泣いちや思だよ、お父さんは怒り坊だものね」

藤子「オ、可愛い子だのう……善かい、汝、世間でいろんな事を云はれた
 時、お母さんを恨むかも知れないが、お母さんは決して……決してそん
 な悪い事をしたのではありませんからねえ……お母さんは死んで身の潔
 白を世間へ知らせてやるからねえ、そんな、死ぬ時にまでも女は嘘は吐
 きません、私が遺書が證據だから汝はそれで母さんの無實の罪を云開し
 ておくれよ、ねえ、守雄さん、頼みますよ」

「……死ぬ時、私には嘘偽は云へません、剛さんもお父さんもお母さん
 遺書を認める」

も、世間の人もこれて嫌疑を晴らしてくれる事だろかねえ、それでもま
 だ私を疑ふなら書いた文字が一々幽霊になつて迷うて歩いてとも私の身
 の潔白を證據立ててくれ……」

守「お母さん、今度の日曜には大磯へ行かうねえ、海水浴が面白いから……」

藤子「あれ又寝言か……今度の日曜には……お母さんはもう墓の中に居る
 んだもの、守雄さん、大人になる迄汝の世話を焼いてやらなくて先へお
 母さんは死んで了はねばならないやうになりました、何卒赦しておくれ
 ……お父さん、私は貴方にまで疑はれましたが、死んで了つたら疑も晴
 らして可愛さうだと思つて下さるでせうねえ、お母さん、貴方もさを御
 愁嘆なさる事でせうが、何事も因縁事と諦らめて、何卒お赦しなさつて
 下さいまし……」と伏沈む、やがて手紙を捲終つて「……ア、何時ま
 て泣いてたつて涙の盡きる事ではない、身から出た錆だと思つて諦らめ
 やうとは思ふけれども、眞實にこの様なぬれ衣を着せられては口惜しく

つて口惜しくつて死んでも私は死切れない、明さん貴方はあんまり……
 けれどもねえ、もう死んだ人を恨んだつて仕方のない事ですもの、之も
 皆、私の造つた罪の酬てムいませう、この遺書を御覽なすつたら剛さん
 もお疑を晴らして下さるてせうねえ、然う云へばもう一目剛さんに……
 フ、せめてあの御寫眞にても……」
 洋燈を持つて起上り、壁際の肖像畫の側に立寄り
 「剛さん私は貴方に一寸とても疑はれたかと思ふと、何より口惜しうム
 います、私が死んだらお疑を晴らして下さるてせうねえ、離縁なんて、
 そんな事はもう仰やらないてせうねえ、剛さん、私は何時までも貴方の
 妻でムいますよ……」
 守雄お母さん……怖いよ、怖いよ……」と飛起る
 藤子「マア……守雄さん、何うしたのですよ」
 守今、明さんが来たんだもの、小田川の明さんが僕を捕へに来たんだもの、怖かつたわ」

藤子「そんな汝、夢を見たんでせう」
 守「夢だつたか知ら……けれども怖かつたわ、眞實に僕は喉が詰まるやう
 だつたもの、お母さん、明さんは死んぢやつたつて、何うして死んだの、
 眞實に死んだの？」
 藤子「もうそんな事を何んにも聴くものではありません、……もうお寝み
 なさいよ」
 守「だつて僕は怖いからもう寝るのは思だ、起きてゐやうか知ら、お父さ
 んはまだ歸らつしやらないの……」
 藤子「オ、お父さんはもうお歸りではないよ……お母さんが此家に居る
 中は、お歸りではないかも知れないよ……」
 守「何故お父さんが歸らないの？」
 藤子「もうお寝みよ、ね、早くお寝みなさいよ」
 守「お母さんはお泣きなすつたのねえ、涙が出てよ、何うしたのかね？
 ……」

藤子泣きやしませんよ、泣いたりなんかしますものか……もう、善い子だからお寝み……」

守「けれども又明さんが来ると怖いんだもの」

藤子「もうそんな事を云ふではありませんよ、……お母さんは何んだか蝶として来るからね……」

守「ぢやアお母さんと一緒に寝やう、ねえ、あんなに僕を一人置いて、起きて行つたりなんかしては駄だよ」

藤子「汝何時迄もそんな赤見ではいけません、早く大人になつて、一人で寝るやうな癖を付けておくれよ、善いかい、お母さんが一寸と抱いてやりませう、ア、大分重くなりましたねえ、顔をお見せ、……お母さんの顔をよく見てお居なさいよ」

守「お母さん、涙が睫毛に溜つてるよ……お加減が悪いのかい」

藤子「お母さんの顔をよく……善く見てお置さよ」

守「お母さん、何故泣いてらつしやるのね、僕も悲しくなつて来るんだもの、泣いちや思よ」

藤子「……お母さんは……泣いてるのぢやアないよ……さアもう寝ませう、ねえ、さア早く寝ないといけませんよ」

守「僕も寝るからお母さん、逃げぢやアいけないよ善いかい、僕はお母さんの手を儘かり捕まへて寝るから」

藤子「……もうすやくと眠入つた様子頑是のないものではある……ア、何時まで名残を惜んでも果のある事ではない、守雄さん、今度生れて来たら又母子になりませうよ、けれどもねえ、こんなに早く死別かれねばならない様な薄命の親子にならもうもう生れては来ますまいよ、何卒大人になつておくれよ……剛さんの催眠剤の、このモルヒネが、私の命を取るのかねえ……」

○剛、岩太郎、二人連立つて入来る。

岩「斯ういふ事は篤と本人の了見を聞き糺して見て、念にも念を入れた上

てなけりや、後て又とんだ後悔する事になるから、剛さんもまア善く氣を静めて、娘の云ふ事を聴いてやつて下さり」

剛唯頷いてゐる

岩 藤子……「ヤア、藤子は居ない、藤子、藤子……藤子が居りませんぞ」

剛 エ……まだ、寢床も暖かい様だが」

岩 藤子……藤子……「汝、飛んだ短氣を起したんぢやあるまいの、藤子……藤子……それとも憚へても行つてゐるのか」と周章て、洋燈を持つて探

しに行く。

剛は一人佇立つて思入。

岩 太郎歸り來つて「何處にも居ない……こりやア飛んだ事になりましたぞ、剛さん、汝あんまり、叱り様が過ぎました、悪替の無い大切の一人娘に、何う斯う云ふ事があつては私はもう生ては居ませんぞ」

剛 お父さん、まア然うお周章なされるには及びませぬ……」

岩 これが周章んで居られるもんかい、大切の大切の一人娘を……オ、守

雄に聴いて見やう、コラ、守雄、コラ守雄……」

剛 守雄、一寸とお起きなさい……」

岩 コラ、守雄、お母さんが大變なのに、早く起きんか、コラ早く起きんか、お母さんは何處へ行つた、藤子は何處へ行つた……汝一緒に寢てゐながらそんな事で濟むと思ふか、コラ守雄……」

守 お父さんの？

剛 お母さんは何うしたんだい」

守 お母さんは僕を抱いて寢て下すつたの、もう夜が明けちやつたの？」

岩 太郎「コラ、そんな寢惚けてゐる處でない、お母さんは何處へ行つたのだい、汝知らんのか」

守 僕は寢てたんだもの、お母さんが居ないのかい、……アツ、お母さんは、僕が一生懸命になつて掘へて寢てたんだのに、又何處かへ逃げて行つて了つたんだねえ……」

岩 お母さんは死んぢやつたかも知れないのに、汝、それを傍へ寢て、

知らんといふ事があるもんかい」
空お母さんが死んぢやつたつて……ワッ」と許り泣出す。
空コレ、泣かんでも善い、お母さんは何處へ行つたか知らんのか」
空お母さん！……お母さん！、死んでは忌だよ！」と泣く。

その中、剛、蒲團の下より遺書を見附け出す、
剛お父さん……遺書があります」

空何んだ遺書……そりや大變だ、早く皆を起さにやららん、オイ皆起さ
ろく、主人の大變があるのに、知らん顔して寝てるといふ事があるか、
皆起さろく」と喚き散らして駆け入りつ駆け出す、
剛燈下に遺書を見る、

空お母さん！お母さん！「と泣いてゐる
空何と書いてあるか、早く、早く読んで聴かせてくれ……」

剛何々……」
私の身は飽迄潔白にて、姦通などと汚らはしき事夢更々覺えなく候へ

共明さんより戀の叶はぬ怨を受け、無實の罪を云ひかけられて口惜しく
口惜しく、他く迄申開き致し度は存ながら、明さんは已に海中へ身を投
じてお亡なりなされ候と有からは、最早私の云分は相立ち不申、我夫様
へも、假にも一時の我儘の振舞を相見せ、谷の程空恐ろしく、何も
彼も女心の淺果敢さより起り候事と我ながら我身を怨めしく存候外之な
く候へ共、十年連れ添ふ我夫より、由なき疑を受て離縁すると云はれ候
事、誠に殘念この上なく、何んとしても生てる事出来不申、死ん
て身の潔白の申開致し候間必ず、御疑ひ晴し被下度、死んでも貴方の
妻と思召し、離縁などは最早、口へも出し被下ぬやう念じ上り
父上へも母上へも海山の御高恩報ずるに由なく先立つ不孝の罪は幾重に
も、御詫申上候、兎角申す事の後や先に相成り候へ共、斯様な我儘の
身を長く御辛棒遊ばして妻と呼び被下候段、我夫のお情と今更ながらか
へすくも御禮申上り、守雄の事は一意に頼み上げ……」
空短氣な事をしてくれたのう……剛さん、汝あんまり叱様が過ぎました、

娘に罪はありません、あの娘は潔白ですぞ、天にも地にも悪替のない一人娘を埒もない事で先立たせて、私はもう此世に生てる望はない、死ね程なら私が代つて死んでやるもの……チエツ残念だ」

剛「お父さん、周章てる處ではない、早く後庭の方を探して見たが善ムいますヤ、これはモルヒネの罎……」

岩何に、あのモルヒネ、チエツ仕様のない事をしてくれたな」

剛「兎に角早く探がして見るが善ムいます」

岩「オ、まだ死切もせんかも知れん、早く……コラ……汝等、寝惚てる處ではない、早く裏庭を探がして見ろ」

剛「奥さんが裏庭の方へ出てるかも知れんから早く探して見ろ、井戸や、泉水や、庭木の中を手分して氣を付けて見ろ」

書生、下女、小間使一同周章て駆け出す、

岩「ア、まだ愚痴を云ふには早かつたか、私も探して見やう、剛さんも探しておくれ」と駆け込む。

剛「遺書を讀返して愁然たる面地。」

守「お父さん、お母さんは死ぬつて、眞實なの？……お父さん、お母さんをお父さんが叱るから悪いぢやアないかね、……お母さんが死ぬぢやつたら僕は何うせう……、僕は何うせう……」

剛「泣かんでも善い、泣くな、泣くな、汝はお父さんの子だぞ、大臣の子がそんなに泣くもんぢやアない」

守「だつてお母さんが死ぬぢやつたらいけないんだもの……お母ちゃんお母ちゃん！」

剛「……泣くなと云ふに……泣いてはならんぞ……」

守「だつて獨自に涙が出るんだもの」

剛「エ、泣くな、弱虫……エ、泣くな……」と顔を反けてゐる

川村先生、奥様は奥庭の泉水の中へ投身遊ばしてお居なされました、もう醫師も參つて手當をして居ますが容易に御蘇生なされません……」

剛「エ……あの泉の中へ……、死體が上つたといふのか……」

守お母ちゃん！、死んぢやつては思だよ！く」
剛泣くな……泣くな、泣くんてはない……醫師は誰を呼んだのか
川村あの、お隣の榎岡博士がお出てなさつて居ます」
剛然うか……」

岩太剛さん……娘はとうく死ましたよ、まア見てやつてくれ……」
後より死體を擔ぎ込む、榎岡醫學博士、助手、家人等従ふ。
榎岡何うも飛んだ事……先日から貴君が不眠症と仰るので差上げて
置いたモルヒネを頓服なさつて、苦しみのあまりの御投身と見えます……
奥さんは平常から些とヒステリーの兆候があるやうてしたが何うも御
氣の毒な事……」
剛それぢやア、あの……私の薬が妻の毒薬になつたのですな……まだ顔
色も變らず、生きるてやうてムいしますが……もう手段はありませんで
すか」

慟もう手段は盡きて了ひました」
守お母ちゃん……お母ちゃん……お母ちゃんてば……と泣伏す。
岩眞實に夢の様だ、夢ぢやアないか知ら……こんな事と知つたら私は何
んて泣を叱るもんかい、叱つたのも皆汝が可愛さからだ、藤子、藤子、
情ない事をしてくれたのう、藤子……お父さんだ、ア、物云ひ度さうな
口をして、オ、嘸残念だつたろう、無念だつたろ……」
守お母ちゃん……お母ちゃん……死んぢやつては思だつて云ふにねえ、
お母ちゃん！」
岩オ、守雄、お母ちゃんはもうこんなになつて了ふて……藤子、汝は
さぞ死際が辛かつたろう、口惜しさうな顔をしてるが、道理だ、道理だ、
身に覺のないぬれ衣を着せられて、オ、嘸、無念だつたろう、残念だつ
たろう、そんなに死ぬ程なら何故その様に一言私に打明けて一顧相談し
てくれんのぢや」
守お母ちゃんく、お母ちゃん……」

岩 短氣な事をしてくれて、汝、眞實にお父さんは何の爲めに悪口を云はれてまで心を鬼にして、金を溜めたのぢやと思ふ、汝が死んだらお父さん等は何うなると思ふ、エ、汝、女ぢやと云つてあんまり浅果敢ぢやないか、藤子……藤子、最前の別れが此世の別れとは知らなんだ、エ、些とは親の身にもなつて見てくれ、ば善いに、エ、情ない、情ない、藤子、藤子……も一度生きてくれい、生きてくれんかいのう……」と泣沈む。

守 榎岡の叔父さん……お母ちゃんを生かしておくれよ、お母ちゃんを生かしておくれよ」と泣く。

堅 守雄さん……泣いてはいけない……それでは私はいづれ后刻又……」と退散

剛 何うも夜中御苦勞さま……御見送申せ」と家人を去らしむ

○安子泣きながら入来り

「汝まア……汝まア……眞實に死んだのかい……エ、まア眞實に死んだのかいのう」と之も突伏す。

岩 剛さん……汝之でもまだ娘を疑ふのかい、藤子の身に後暗い事があつたと思ふのかい、聞けば彼の綾江とやらも汝の手に懸つて殺されたさうだが一人て足らず二人まで……この大切の一人娘まで殺して置いて、見れば泣きもしなさん様子だが、汝、それで人間んかい、それで夫婦の情合があるといふものかい、まだ娘の盡し様が足りないとも云ふのかい」

安子、エ、それぢやア、あの綾江とやらも殺して了つたのでムいますつて、……否、矢張そんな事を云つて、娘を追ひ出す手段を企んでたのに相違ありません、追出すなら生かして返すが善い、娘を生かして返しておくれ」

剛 お母さん、お父さんも何卒まア氣を落着けてゐて下さい……私もこんな事になろうとは實に思ひも掛ませんでしたよ……」

岩 思ひも掛げんでは済みますまい、剛さん汝は周章でも騒ぎもなさらん様子だが一體誰の庇陰で今日大臣にもなつたんだ、些と物を考へて見なさい、善い聲を取當てたと喜んでた其人故に、自分の大切の一人娘を殺

さうとは私は知らなんだく、藤子、何卒許してくれ」
 安「だから私が云はん事か、貴方が娘の好いた男を無理に引放して、自分の
 の聲にてもするやうに、素性も知れぬ他人に添はせて、とうくこんな
 情ない死様に逢せたのです、思當りましたか、さぞ怨んでゐやう、藤子
 汝、眞實にこんな非業の死目をしに此世へ生まれて来たのかいのう、……
 可愛さうに、これも一つは父さんが高利貸て人を苦めて、貧乏人の血
 を吸つたその報が子に廻つて来たのかも知れないが、罪も咎もないもの
 へ親の罰が報うて来るなんて、エ、神佛も恐めしい、何故私を殺しては
 下さりませぬ……」
 岩「ア、未だ私の非業の盡きないのかと思へば剛さん許も責められまい
 ……矢張、私が悪い、私が悪い、娘許してくれ」
 安「眞實に思ひ出せば昨日の事、娘が家へ来ました時に今茲は二十七だ
 から兄さんの亡なられた年廻なので何んだか心細いと云つてましたか、
 皆こんな前表でありましたか、藤子、さぞ口惜かろう、無念だらう、齒

を喰縛つてるぢやアありませんか、オ、……さぞ残念で有たろうの……
 剛さん生かしてくれ、生かして返してくれ、自分の不埒は棚に上げ、
 無實の罪を云かけて、汝さんはこの娘を追出す企をしてたんだらう、生か
 してくれ、さア生かしてくれ」
 安「お父さん、お母さんはもう生かさないの」
 剛「そんな無理を云はないで、よくお母さんの顔を見てお置きよ……よく
 お母さんの顔を……」
 安「だつて、お母さんはもう何とも物を云つてくれないのだもの」
 剛「オ、藤子……汝、浅慮な、逸まつた事をしてくれたのう……」と手を
 握る

(幕)

第七幕

(其一) 夢の場

○音楽の響、合唱の聲、
うきよの花よあざみ草

棘は情の手にも衝つ
悪魔の裔か、くろ蛇の

闇にかぐやくのろひの眼
そのあざみさへ根を絶えて

蛇もひそまぬ冥途の國
王も美人も宰相も

富の光も一色の
暗の帳に鎖されて

平和の鼓、平等の
笛鳴りひびく尊さよ、

萬の精靈舞ひ出ては
羽風に落つる塵もなし

悲もなし愛もなし
悲なきは幸よ、

○被衣の女天使二人、白百合の花を手にして白百合の園中に立
出づる

甲天使「昨日、この園へ来た許りなのに、もう人間界の苦勞も愛も皆忘れて
了ひました、あの楽しい音楽の音に日が暮れて、清かな白百合の色に夜
が明けて、風と舞ひ、霧と戯れ、眞珠のやうな露を吸うて送つてゐると
眞に何んの心配もなく苦勞もなく、こんな事と知つたなら寧ろ早く死ん
で此方へ來るのでムいしましたのにねえ」

乙天使「私はもうあんまり樂過るので、この頃は何となく物足らぬ様な氣も
しますけれど、それでも浮世に生きてゐて、辛い、悲しい思をしてゐる
よりは餘程増てムいますわねえ」
甲「然う仰やると綾江さん、今更云ふのも耻づかしうムいますか人間の世

に居る中は、私は眞實に貴方の事が嫉ましくて、いろいろな邪推やら廻り氣やら、寝てる間も私の髪の毛が一々蛇になつてゐたかも知れませんが、濟みません事で、ムいしましたのねえ」

「あれ、藤子さん、もう人間の世の事は何も云ふてはありませぬよ、お互に罪許り造つてたんで、ムいしますもの、それも元を糺せば男可愛しさの一念から、神様の命令なら仕方はありませんけれども、此度又生れて行かねばならないのならもう再び、女には生れ度くムいませぬのねえ、女に生れた許りに、性悪男に馬鹿にされたり欺されたり、いろんな罪の重荷を纖弱い肩に脊負されます、ホ、ホ、私は又人間界の事を云ひ出しますのねえ」

「私ほもうもう、再び人間に生れやうとは思ひませんが、何うあつても、も一度行けと神様が仰やるなら今度は女王かなんかに生れまして男の上立つて權威を振ひ、世の中の男といふ男共を虐めて虐めて、虐め貫いて見度うムいします、女でも強い者にさへ生れたら男は皆弱虫になつて降

参して丁ひますよホ、ホ、ホ、こんないろいろな悪い思は假にも胸の中へ宿してはなりませんのねえ」

「然うてムいします、もうこんな思ひで一時間も胸の鏡を曇らせてはなりません、けれども浮世に居る時は何うした悪縁であんなに一人の男を奪合ひしてたのでムいませう、考へて見ると夢の中で斬合してたやうてムいしますのねえ」

「眞實に今から思ふと、こんな詰らない争はムいませぬでしたよ、今日はまだもうお互に、こんな仲睦い姉妹になつて了ひましたが、それでも人間界にゐた時は不思議に辛い事でムいしましたのねえ」

「眞實に辛うムいしましたのねえ」

「私こそ許して下さいよ」互に手を握る

「オ、お互に氣を付けて、よくこの園の番をしてゐないと、清淨無垢な白百合の花の蔭へ、又蛇が匍ひ込んではなりませんよ」

乙「この園の婦人を迷はせに、性の悪い蛇が又何日何時忍び込んで来ます事やら、眞實に油断なく見張をしてるねばなりません」

○鬼頭剛、大禮服、帯剣、金光燦爛として出来る。

甲「通る事はなりませんぞ、この花園は男子禁制の女の樂園」

乙「性の悪い雄蛇に、宿貸す花蔭はありませぬよ」

剛「何んと仰やる、假令女の樂園にもせよ、男子禁制にもせよ、そんな事に頓着する鬼頭剛ではない、行かうと思へば天の果にても行き歸り度くは大海を横いて留めても歸る、我は我が意志の自由に従ふより外、他人の御世話は受けぬ性分だから、何卒入らぬ心配せずとち控へ下さい」

甲「天使通る事はなりませんと申しますに」

乙「天使人間の世とは違ひ、此處は我儘勝手は通りませぬよ」

剛「人間の世でも、假令天国でも、地獄でも、英雄は常に英雄、偉人は何時も偉人、命令はするが、他から命令を受ける様な意氣地の無い事はしないのです、見ると誠に目も睛々しい白百合の花園の中へ入つて一技手

折るのが何の御邪魔になりますか、云ひ出したからは一歩も後へは退かぬ私ですから是非共通ります」

甲「通す事は何うあつてもなりませんよ」

剛「婦女子輩が小癩立な、金切聲に喚かれて、怯える様な弱虫ではないわ」

甲「では貴方は私等に御命令なされた神様の大御力をも怖れないで」

乙「私等を女と侮つてそんな、我儘を通さうと仰やるのですか」

剛「私が前途を妨げる奴は、女でも小兒でも、獅子でも鬼でも假令神様でも、蹴飛ばして難ぎ倒して行くまでだぞ」と剣を抜く

○甲乙、二天使顔を見合せて頷き合ひ

甲「いかにも貴方の仰やる事、女風情で抵抗する事は出来ませんから、それではお通し申せまうが、唯一の神様の御命令があります」

乙「それはこの白百合の花園の中へ入るものは、人の世の富も位も皆脱ぎ捨て、私等と同じ色の、唯清浄な着物一着」

甲「左もなくば花蔭の蝶や小蜂が敵と見て毒矢を射かけ、毒ある霧を吹き

かけて立處に命を絶つとの事てムります」
乙「何卒、貴君もその目眩るしい服を脱ぎ捨て、私等の被衣を一重づ、身に纏うても入り下さいませ」

剛「フム、さらばこの大禮服も……」
乙「胸に光る勳章も……」

乙「御手の劔も」
甲「頭の榮の冠をも」

剛「皆脱捨いと云ふのか」

甲「左様でムります、浮世の寶も御命には換へられますまい」
剛「エ、一時なら構はないわ」と脱捨る、右左より被衣を着せる、

甲「それではもうこんな汚れたお召物は焼捨て、了ひますよ」百合の花にて地を打つ、紅の焰忽ち燃え上る

剛「エ……これは……これは……まア、劔までも燃ゆるとは……」

甲「この火は女の情の焰、假にもこの樂園に入るものには、この様な浮

世の汚れた者は些とも入用はありませんもの」
剛「始めて二人を見て「ヤア、其方は綾江、其方は藤子……何うして此處に……」

甲「存じません」

乙「存じません」

甲「この様な男の方には些とも見覚えはありませんよ、さア蛇が鎖を脱ぎました、皆さん早く……」と、和斷の百合の花を振る、白翦、天上下り蜩の如く剛の一身に向つて降り來る、白百合の花園一面に紅の焰の海となる、

剛「ヤア……これは……ヤアこれは……さては私を欺したのか、……」

甲「乙「欺した人は欺されますよ」

剛「ヤア……これは、苦しい……苦しい……苦しいわい、さては私を欺したか、婦人子輩に欺されるやうな私ではないが……チエツ残念だ……苦し苦しい……」

銀翳しきりに、頭、手足を射る、剛、両手に拂ひ落しつゝ、悶え苦しむ
 綾江「剛さん、欺された人はこんな辛いムいすよ」
 藤子「貴方はあんまりお氣強うムいすよ、些とは他人の事を考へないと、自分の事を考へてくれるものはありませんよ」
 綾「命を捨て、まで貴方を愛してた私でさへもうすつかり愛、を盡かしませんでしたよ」
 藤「貴方は自分の妻にさへもう見離されて了つたのですよ」
 綾「自分が高い處へ昇りさへすれば他人は踏殺しても構はないか知りませんが踏殺された人はこんな苦いのですよ」
 藤「貴方を心から愛して居るものは、もう世界に一人もありませんよ」
 綾「貴方は人の住つて居る星の世界へ行つて、一番豪い人に成り度いでムいすか」
 藤「貴方は死んだ後までも自分の我意が通るものと思召してらつしやるんですか」
 綾「貴方は土の底でも大禮服が光るものと思ひなさんですか」

剛「アツ苦しい、許してくれ……許してくれ……助けてくれ、綾江……」
 藤子「……助けてくれ……助けてくれ、悪かつた、夫婦の情愛といふものもあるに私を見殺にする氣か、助けてくれ……」
 甲「天使、あれ御覽なさい、あんなに射られても衝かれても、血も出ず涙も涸れたこの人」
 乙「天使、生てる中に私等女を馬鹿にしたり、欺したりして置きながら死んでから情愛とは何事でムいす」
 甲「乙、義理も情も息ある中の事ではムいせんか、卑怯者です、貴方は口程にもない臆病者です、強い人なら、豪い人なら、これ位の呵責に堪へられぬ事はありません」
 剛「助けてくれ」
 甲「もう私共は神様の御坐に歸つて、人間の世の英雄が、この世に来て苦むさまを御知らせ申上げねばなりません」
 乙「弱き者には慰めの百合の花園も、強き者には怒の焰の海となります」

る、その堅い石の様な御心の、熔けて暖な湯となるまで、其處にて苦み給へよ」……二人天上、銀翳止む。

「ア、苦しい、……苦しい、浮世で行つて来た自分の所業は皆誤つてゐたのかなア、あの二人の女にまで、左程怨まれてゐやうとは……ア、自分の意志の自由を行ふのがかゝる罪惡とならうとは知らなんだ、知らなんだ、ア、最一度、浮世へ立ち返つて、今度は眞人間の業を行らう、然うだ、些とも早く浮世へ返つて、今一度、人間を行り返さう……綾江、藤子、許してくれ、何卒、今迄の事は皆許してくれて、さア一緒に歸らう、一緒に人間界へ立歸つて、妻と呼び夫と呼ばれ仲睦ましく暮らさうではないか、そんなにつれなくするものではない、さ、早く來んか、一緒に行かないか……エ、來なけりや私一人て、歸つて行くのだ」

立去らんとすれば、忽數多の小天使、劍戟を閃めかして取圍み

「惡魔！再び人間界へは返へさぬぞよ……」

「何……」劍を潜りて奮闘、と遂に切伏せらる、小天使、一同凱歌

を擧げて四散、

剛、悶え苦みながら起直り「オ、……成る程これ程までに切り苛なまれても突かれても血の出ない我が體、こんなに苦しくても涙一滴こぼれぬとは、エ何時の間に血が涸れたか、涙が涸れたか、情ない、……浮世の人を刑罰する權利を握つてゐる大臣が、この冥路の國へ來るや否、死刑よりも千百倍、かほど苦しい刑罰を受けるのも、畢竟人間界に生てた中、我意我慾を貫かう爲の一心から、知らず知らず犯した罪を今茲て神様から報ひ玉ふと見える、ア、悪かつた、今考へると自分の爲に人間二人の命まで失はせて、實に濟まぬ事をしたが……併し、神様、靈あらば聴き給へ、貴方が果して公平なら私が國家社會の爲に盡した功績は認め下さるべき筈だ、私は大きな善をなさんが爲に小さい惡を犯したのだと思つてゐるが、その小さい惡許りが彼方の御記録に上つて、その大きな善はお見落しになつたのではムりませんか、神様、貴方が果して公平なら、この様な刑罰は重過ぎます」

音樂の響、天上聲あり

「爾知らずや、人間、惡を犯して善を爲さんとば、僭上也、毒ある器に盛りし清水は皆悉く毒ある水、天の爵は地の爵の大小輕重を衡り直す度量衡と知らずや」

剛地の爵にも囚人に情を酌み分くるの減刑がありまするに、天の爵は唯殿しいのみにムりまするか」

天上の聲「爾も情といふ字を辨へたるか、情は互にかけ合ふもの、爾人に辛くして、人我に辛かるなと求むる者には、天の爵も唯求むるまゝに加へられん」

剛一國の大臣宰相たる者が、婦女子とその衡を均うして量らるべきものでムりまするか」

天上の聲「人の世には大臣宰相あれども神の司るこの國には人間あるのみ、唯眞人間こそ人間なるぞよ」

剛獅子には獅子の力を授けて羊を搏つに任せながら、智恵ある人が智恵

無きを追ひ落さんが何の不條理、差別を興へて平等なれとは如何なる御意でムりまするか」

天上の聲「人と獸の差別は其處なれ、力は柔和を助くべく、柔和は力を味附けて圓滿なるべき人間世界、爾其一を知つて其二を知らざる故に罪あり」剛されども人間の心に燃ゆる我意我慾は神の興へしものなるに、开を用る者には罪あり、興へしものには罪無しとの事でムりまするか」

天上の聲「人の心は情の舟、我意は即ち舟やる舵、道迷ふなと天上に掲げし愛の星をば望まず、只管我慾の帆を張り上げ、無二無三に押切らばやがては暗礁に乗つかけなん、汝は即其一人なるぞよ」

剛さらば再び帆を立直し、今一度、人間界を眞直の道筋踏んで辿つて見度し、お許し下さるか」

天上の聲「汝に預けし定命の已に盡きたる上は詮なし、無限に亘る時と世に、唯、有限の果敢くも、短き夢には似たれども、息ある中の行ひはやがて無限に消えざる人生、唯悔のみぞ今は早汝に唯一の懋籍なるべし。」

剛「けれども、も一度、人間に……」
天上の聲「开は適はぬ願なるぞ」
剛「けれども……」と立騒ぐ、靈然天上より舞ひ下り、剛を拉して昇天す、

(其二) 覺醒の場

○守雄、駈け來つて、「お父さんく、もう夜が明けましたよ」と揺り起す

剛「悶えながら夢醒めし體「ア、夢だつたか……體中汗でびつしよりだ、私の身を縛る法律の繩は無いと思つたが、矢張、心を縛るものがあるのかなア……二人共許してくれッ」
守「お父さん、大變、覺されておらしつたのよ、夢を見て？」
剛「ウム、夢……夢だ……夢、夢、何事も夢に違ひないなア……」
守「何んな夢？……」

剛「苦しい夢だつたよ、同じ夢でも楽しい夢が見度もんだ、オ、けれどもお父さんは眞實に死んでは居なかつたのだなア、お父さんはまだ生きてゐるのだな、まだ人間世界に生きてゐるのだつたな」

守「お母ちゃんはまだ死んでお了ひなすたのねえ」

剛「ウム……あれは眞實に死んで了つたのだ……もう取返の附かぬ……可愛さうな事をした」

守「僕も死ぬとお母さんに逢はれるのだらうかねえ」

剛「そんな事を……そんな事を云ふてはない、死んだ者はもう仕方がないよ、生きてゐる中の事つた、ア、何事も生きてゐる中の事つた」

守「お父さんは死んぢやア否よ、ねえお父さん……御病氣は何んなの、少とは善いかねえ……」

剛「オ、可愛い奴……心配する事はない、お父さんはまだ死なないよ、殺したつて當分死にはしないよ、今死んではならないんだハ、ハ、ハ、」

○小間使花

「坊ちやま、まだ仰やつては下さいませんので、ムいましたか、あの、御前様、大垣總理大臣様と外二三人の御方がお見舞にお越し遊ばしました」
 守ア、お父さん、大垣の叔父さんと、小崎の叔父さんと、それからあの嘘吐の益田の爺いと今來るてのよ」
 剛「然うか、皆此方へお通ししてくれ」

○大垣總理始、小崎、益田、二大臣入來る

大「先日から御病氣といふ事だから折角何うか思つて心配してたぢやが、この頃は何ういふ工合かな」
 剛「有難うムいます……大した事でもありませんが、まだ少し腦の工合が悪いので、醫師の忠告を容れて、斯うして引籠療養をして居ます……寢臺の上で甚だ失禮ですな」

大「何、少とも構はん、先日の御不幸以來引籠、御引籠中だから、いかな鬼頭君でも妻君を失ふた御愁傷には勝てないものだ、皆が噂をしてるが、私が思ふに、然うてない、妻君の御不幸位に……位と云つては失敬

だが、その爲に國家の政務を見ないと云ふやうな人とは日頃から氣象が違つてゐるから、これは矢張り、平常の働過度が此際どつと一時に押し出したのぢやろと、斯うまア私は御見立てしたのぢやが、それでも思つたよりは善い元だ」

益「然うてムいます、いかな病氣の力でも長く鬼頭君を寢臺へ押へ附けて居る事は出来ません」

小崎「併し君も存外血色が悪い、まだ〳〵養生しないといけませんよ」

剛「難有う……一家の私事の爲めに、國務を見ないと云ふのは甚だ濟まないが何うも氣分が勝れないので、心の病氣……イヤ、實際、病氣には勝てませぬてや」

大「それは御尤の話ぢや、決して氣を焦らさずと、ゆる〳〵御保養なさつたがよろしいが、實は鬼頭君、此處に一つ難題が持上つて來たので、斯う打揃うて參つた譯ぢや」

剛「ハア……難題とは？」

六、小崎君から一つ……」
 小崎内閣御病中、お耳に入れるのも如何かと思ふが實は内閣の運命に關する問題ぢやて、ハ、ハ、ハ、私はあまり大事とも思つてゐないのだが、……それは例の東郷海軍大臣の後任の一件で、折角、的にしてゐた小山中將が政党内閣は思だと云つて頑固に構へて何うしても承諾してくれないもんだから君も略御存じの通り、舊政友黨派からは末田君が自ら任じて候補者に立たうとしてゐるし、又急進黨からは例の懸塚君が是非にと云つて追つてゐるので權力平均とか何とか下らない紛擾が持上つて、大に軋轢しかけてゐるのぢや……」
 剛、フム、それは器、耳にせんでもないが、勢がもう迫つて來たのかな」
 益田「なか／＼火の手が盛んに上つて來たのぢや、我輩は必死になつて雙方を宥めて、そんな見つともない内輪喧嘩は廢止々々と云ふのだが末派の連中が他の二三の大臣を互に神輿に昇ぎ上げて、わい／＼云つて騒ぎ立て、る處へ、例の獵官洩の不平分子が油をさしてゐるもんだから容易に

鎮靜が附かん、其まゝに猶豫してゐると今にも内閣瓦解の導火にもなりさうなので、吾輩の考では此際、是非、鬼頭君に兼任といふ事にして貰つて、この難關を切抜るより外策はあるまいと思ふのぢやて……イヤ、何日かは何うも令夫人の事に關してとんだ粗勿を申上げて、少し宿醉の氣味でもありましたろうが、誠に、ハヤ何うも面目次第もありません、何卒まア許してくれ給へ、決して悪意があつた譯ではないんだから……」
 剛、苦笑しながら「然う公事と私事と混雜にして了つては困るね……して、私が一時海軍大臣の名儀を借用する事になると、内閣動搖の一時の支棒にならうといふのですか」
 大耳「それで、鬼頭君が海軍大臣を兼任して下さると、我輩年來の主張たる例の海軍擴張案の通過も大さう安全だらうと思つて、……衆議院の方にはまア心配せんでも善いが、貴族院の連中がなかなか反目嫉視してゐて、大に反抗を試みさうな形勢があるから、此等の手合を壓伏するにも、止むを得ずんば例の黄金政略の必要があるてや」

小崎 黄金政略はもう断然用ひないが善かろうと思ふ、實際、然らば人心を腐敗せしめてまで政治を行ふ必要がないから私は寧ろ公明正大に天下の輿論に訴へて、それで成立が難しければ袖を聯ねて總辭職といふ舉に出たい意見です、海軍大臣の椅子は鬼頭君で一時彌縫して置くとしても、黨内の軋轢の仲裁やら、小競合の調停、殆んど兒戯に類する事に奔命に疲らされて、それが大抵うるさい上に、又不正手段まで用ゐて貴族院の真心を買ひ取ろうといふのは、もうく私に堪へられぬ、願ひ下として貰ひ度いのぢやて」

益田 小崎君は稍もすれば、君子を氣取るから圓滿に行くものが行かなくなつて来て困る、兎に角我輩は政黨内閣の摸範を天下後世に示さんければならぬのだから、理想の行へるまでは何うあつてもこの内閣の壽命を持ち續ける工風をせんければならぬのぢや」

小崎 ハ、摸範内閣が黄金政略の御手本なんか出しては、臭を後世に垂れるといふべきぢや、それで憲法政治の精神を善く解し得たものと云は

れるてせうかなハ、ハ、」

大馬 小崎君の様な馬鹿正直許り云つてゐては、とても今日の政治は取つていけないのぢや、鬼頭君、それで君に是非今の件を御承諾願ひ度いのだが……君が承諾してくれんけりや勢、内閣の總辭職といふ騒になるのだから、君に是非、一番引受けて貰ひたい」

益田 何卒君、一番承諾してくれ給へ、お願ひだから」

大馬 私が海軍なんかの椅子に倚つた處が薩張譯が分からぬのだから鶴の代りに鳥を使ふのと大した相違はないですが……」

大馬 名義丈ぢや、唯名義丈ぢや」

剛 ムム……名義丈……左様ですなア……イヤ、大臣なんて畢竟名義丈のものかも知れないですなア……」

小崎 フム、鬼頭君近來の警句だ、名義丈さ、畢竟今日の大臣なんて、馬丁にても金モールの大禮服を着せたら出来る仕事ぢや、私は内務の椅子に倚つて毎日々々、盲印を捺すのにもう大分倦々して来たから、これか

ら些と歐米でも漫遊して、各國の政治を視察するといふ年來の宿志が果
 したいのぢや、イヤ失敬な云分かも知らんが各大臣未だ智識と經驗と共
 に大に不足してる、私は此際寧ろ總辭職を希望するのだ」
 大抵そんな破壊的な議論はいかん……名義丈でも善いから兎に角君に
 非願はないと此際黨内の紛擾を治める事が出来ないし海軍擴張案が擡
 されると、我黨内閣の體而上、勢、總辭職せんければならんから旁々、
 是非君にも願ひ仕度い……」
 剛私がまア名義丈の海軍大臣になるとしても、海軍擴張案が貴族院を通
 過するやうに計る爲には、矢張黄金政略を要する、つまり私の力でなく
 て、金の力で仕事をやる、私は畢竟、金の機關に過ない事になつて了
 のですな……フム、然うすると鬼頭剛は一個の士偶たるの價值しかなか
 なつて来る」思入、
 大急に君は意氣銷沈して來た様だが一體これは何うしたんだな」
 剛自分に海軍大臣たるの資格があると自信さへ堅く握つてゐたら私は自

ら進んで、此難局に當る事を敢て辭しない心算だが、已に其自信がな
 いから随つて勇氣も出ないのです……ア、名義丈……、名義丈握らせ
 られて、それで喜んでゐるやうでは鬼頭も末路です、これはまア御辭退
 させう」
 少ツム……君も、思つたよりは豪傑の士だ」
 大鬼頭君それぢやア、今云ふ通、内閣總辭職の騒動が持上る、是非に一
 番、この度丈は狂げて、御承知を願ひたい」
 益一番、助けると思つて是非御承知願ひ度い」
 大是非、君……一度、是非考へ直してくれ給へ、鬼頭君、も一度是非、
 私が頭を下げてお願ひする」
 益君、この内閣が君一人の諾否に依つて、全く瓦解するか、このまゝ持
 續するか、大切の場合だから是非、輕卒に考へないで、今一應熟考して
 くれ給へ」
 剛フム……私には私の信ずる道を行ふより外道はないのですが……、然

うも二人からの依頼なら、猶篤と熟考して、今の様な御返事を申上げませうか」

大「今の様な御返事では困る、是非一番……」

少「是非御承諾下さるやうに願ひます」

小「まア折角、鬼頭剛君の鬼頭剛君たる處を見せてくれ給へ、何卒御自愛なさい……」

皆々立去る、剛、目送して、それではこの儘失禮します……ウム、私は今迄人を使つてゐるのだと思つてゐたが、矢張人に使はれてゐたのかなア……」

○守雄駈け来り

「お父さん、僕を海軍大臣にして下さいな、お父さんは大臣が二つも要りはないだらうからねえ、お父さん……」
剛「ウム、名義丈なら、汝でも結構、大臣になれる譯だなアハ、ハ、」

(幕)

第八幕

谷中墓地の場

故鬼頭藤子、東郷海軍中將の新塚など並んでゐる

○小田川明、妹雪子に介抱されながら香花を捧げて入来る

雪子「兄さん、眞實に藤子さんは、お氣の毒な事でございましたのねえ、私

もう何んだかお墓に参るのさへ、面目ないやうてムいますよー
明「唯腕又して悄然として俯向いて歩く。」

雪「兄さん、眞實に貴方は善くお説をなさいましたよ、生きてらつしやる中は實の姉さんの様に私を可愛がつてゐて下さいましたが、あんな事があつたもんだからもう私を憎んで……否え、姉さんはそんなに憎んだりなんかする人ぢやないわ、矢張私を妹の様に思つて、下さるのでせうねえ」と袖で顔を拭ふ

「オ、……もうこんな墓になつて了つたのか、藤さん、悪かつた、悪かつた、無實の罪を云ひかけて、眞實に濟まなかつた、私は一旦死ぬ氣で海の中へ飛び込んだが、意氣地がないからまだ善う死なゝいで、阿容々々と生恥を曝らしてゐます、此處へ來られた義理ぢやアないが、藤子さん、許してくれ、許してくれ」

雪子姉さん、何卒兄さんを許して上げて下さいませ……」

○剛、物思ひに沈みながら入り來る

剛「……オヤ、雪さんぢやアないか……」
 雪「アラマア、阿兄さんでムいますの」
 剛「ヤ、誰かと思へば明さんか……貴方はまだ生きてゐたのだな」
 明「ア、剛さん……貴方にお逢はせする顔はありません、何とも申上様はありません、藤子さんに對しても、貴方に對しても何んとも一言の申上様はありません、明は人外者です、畜生の様なものです、戀の叶はぬ怨から罪の無い人にぬれ衣を着せ、それが爲に非業の最期を遂げさせ、

貴方にまで大不名譽をおかけ申して……もう、何んとも申上げやうはありません」

剛「それぢや明さん、藤子には全く罪は無かつたのですな、貴方が故意にぬれ衣を着せたのでしたな」

明「ハイ、全く左様でムります……つい一時の迷ひから私しが心を藤子さんが酌み分けてくれないのが怨めしくて口惜しくて、何うせもう長く生きては居られぬ體、筆を死んでこの怨を報ひ度いと悪魔のやうな心になつて、新聞へも投書する、あんな遺書の手紙もさし出しまして、自分には直に死ぬる氣で、一旦海の中へ入りかけましたが……私は卑怯者です、他意氣地なく出來た男と見えまして、つい死ぬのが怖ろしく、その儘姿を隠して匿れてゐましたが、この胸が何うも堪りません……」咳

雪「鬼頭の阿兄さん、私なんかもう兄さんがお亡くなりなされた事と思ひつめて泣いて許り暮してゐましたが、昨夜ひよつこりお歸りなされた時は

もう吃驚しまして幽霊ではないかと思ひましたのです、何卒兄さんの悪

かつた事は許しなさい下さいまし」

剛「今日は改めて藤子さんの墓へお詫を云つて、その上の思案と思つて、

妹に扶けられて出て来たのでムいます……剛さん、何うなと貴方の御存

分になさつて下さいまし、何卒打つなり殺すなり勝手にして下さいませ、

私は私の手で自分の命を断つ事すら出来ない意氣地なすから何卒貴

方殺してなりと怨を晴して下さい……然したら藤子さんも少しは怨を忘

れて下さるだろうし、私ももうこの世に生きてる苦を免れ度うムいます

から何卒お願ひてムいます」と地上に坐る、

剛「明さん……貴方はもう悔悟したのですなア」

明「全く悪うムいました、イヤもう悔悟處ではありません、死んでも罪

が贖ひ度いのです、何卒御存分になさつて下さり」

剛「明さん……人間ですもの、過失は互です、一々譯を聞けば聞く程、

貴方よりか私の方が藤子に對しては申譯がありません、私は日頃から人

を欺いても人に欺かれる様な人間ではないと信じてゐたのですが、矢張

駄目です、自分で自分を買冠つてゐたのですな、もう過去つた事は神業

でも取返が附かないですもの、これから後は互に睦しく手を取合つて

暮して行かうぢやありませんか、其方が藤子も喜びませう……」

剛「阿兄さん眞實に濟みませぬえ」と泣く、

明「……そんなに御心の廣い貴方とは、私は今迄思ひもそめませんでした、

ア、私の様な意氣地無しは眞實に無用の長物ですなア、一日でも長く呼

吸して生きてゐればなる丈、社會へ病毒を蒔き散らして、人の精神にも肉

體にも不知知害を與へて行く、ア、貴方は眞實に藤子の夫として立派

な方、イヤ立派過ぎた御方でした、その藤子さんの幸福を喜ばないで、

却つて呪うてゐたとは、私はまア何んたる悪漢でムいましたらう、ア、

私は貴方と手を取つて行く價値のあるものではムいません、實に我なが

ら愛憎の盡き果た男でムいます」

剛「イヤ、徒らに前非を悔むよりはこれから後を謹むのが男子らしい行で

すよ、自分で悪事だと思つて悪事を行つてる人間は少い、あんまり自分を信じ過ぎて、不知不知、他人を虐げるのが兎角過誤の基になつてる様です、獸だ、人外ものだと云つて自ら謙つたつて、人間は矢張り人間の仲間を外れる事は出来ませんからお互にこれからは睦しくして行きませう、ねえお互に睦しく交際つて行かう、雪さんも藤子が亡くなつたから、遠慮には及ばない、折々遊びに来て下さい」

雪子、ハイ、難有うムいます………つい伺はふと存じてましても御無沙汰許りしてゐます」

剛「さア、明君………坐つてゐないで立ち給へ、立ち給へ………冷へると病氣にも障るからさア立ち給へ、起つて線香でも立て、やつてくれ給へ」と、手を取つて引起してやる、三人漸く墓前へ立寄る。

剛「………眞實に、私がこんなに、藤子さんの墓へ参るやうな事があらうとは夢にも思ひ掛けませんでした………ア、私は眞實に大罪人でムいます」

雪子「兄さん………あんまり御心配なさると御體に障りますよ」

剛「寧ろこのまゝ此處で死んで了つたら、藤子さんも許して下さるだらうに………」

剛「コレ、君の様に感情許り激してもいかん………そんな事を云つてた日には私なんかは命が二つあつても足りないんだ、莞爾と笑つて自分の前へ愛情の花束を捧げて来る人を、片端から拳で撲り倒して了つたのと似たもの、ア、考へて見ると眞實に、自分には人間の心が無かつたんだ、始からそんな冷酷な男でもないのだつたが、社會へ出て功名富貴に許り憧れてゐた揚句、不知不知の間に體の血が冷く固まつて了つたのだなア、………ア、思ひ出して来ると胸が張り裂けるやうだ………頭の血が煮えくり返る………ア、私が又、明君を叱つて置いて、感情の奴隷になつて了つたやうだハ、ハ、雪さん、笑つて下さるなよ」

雪「否、もう………私も悲くてなりません………」

〇岩太郎、安子、守雄入来る、

岩「ア、此が東郷さんの墓ぢやのう、あの方ももう斯んなにおんななすつ

たか、眞實に人間の一生といふ者は、夢よりも未だ果敢いもんぢやのう」
 安子「幾ら、慾を渴いたつて、人間ももうこんなになつては、金を持つて
 お墓の底へ入れるものではなし、眞實に詰まらん者でいますね、高利
 貸やら何かして、あんなにお溜めなすつたお金が、皆他人の手に渡つて
 了ふのかと思ふと、何の爲に不義理や不人情したのが薩張分らなくなつ
 て來ますよ」
 岩他人と云つて、この孫の手に渡せば矢張血統ぢや、そんな事はもう云
 ふな、ア、南無阿彌陀佛々々々」
 守「東郷の叔父さんも、こんなにお墓になつちやつたのねえ、死んぢや詰
 まらないや」
 岩眞實に死んぢや詰まらない」
 守「あの澤山胸へ懸けて入らした勳章や、劔や、それからあの大禮服は
 何うしたんだろうねえ、このお墓の中へ入れたのか知ら」
 ○

安「ヤ、雪さんか……明ぢやないか」
 岩「ウム、明か、明の幽霊か、何うしたのかい汝はまア？」
 明「申譯はありませぬ、何とも伯父さんや伯母さんにお合せ申す顔はあり
 ませぬ……」
 守「明さん、生きてたの、死んでから又生き返つたの」
 安子「汝はまア何うしたのかい、エ、汝は一體まア何うしたといふんだい」
 と詰寄る。
 岩「藤子は死ました、汝のお蔭で死んで了ひましたよ、明、汝はもう死ん
 だ筈ぢやが……」
 明「申譯はありませぬ……」
 安子「申譯がないで、濟むと思ふのかい」
 剛「お母さん、お父さん、まア何卒お静まり下さい……今更、いくら大き
 な聲をして寝み合つたつて死んだ者が生きて返るではありません、唯、
 墓の前を騒して死んだ藤子へは一層の心配を掛けるやうなもんですから

まア此場は何にも云はないで暫らく控へてゐて下さい、折角明さんや雪さんがお参りに来た信切を無にしてはいけなから何卒何んにも云はないでね」

安王だつて明はあんな、ありもせぬ濡れ衣を着せて娘を殺したも同じ事だもの、……明、あの手紙は本気で書いたか何うだか、さア聞かせい、聞かしてくれ」

岩云ひ度い事は胸一ぱいだが、剛さんが今云つてくれるなと云ふからまア控へて居れ、佛へ回向する時には矢張佛の様な心でなくてはいかん」

安王だつて、口惜うて……」

剛お母さん、さア何卒線香を立て、やつて下さい……守雄もお参りしな
○
守ねえお父さん、お母ちゃんは何れ何れお母ちゃんくつて云つても、もう少しとも物を云つてくれないんだもの、墓なんか眞實のお母ちゃんぢやアないのねえ」

剛オ、……死んぢやつては駄目だのう」

守僕はもう豪くなつたつて、寝めて下さるお母ちゃんが居ないんだもの、僕はもう駄目だ」

守子可愛い事を仰やるのねえ……」と頭を押へて泣く。

剛守雄さん……何卒……何卒堪へておくれよ」

剛守雄、豪くならなくても善い……正直な人間になれ、人に可愛がられるやうな人間にならなくては駄目だぞ、善いか、人に可愛がられりや生のお母さんはなくても、他人が皆、お母さんになつてくれるのだ、善いか」

守けれども眞實のお母さんでなくては、僕は忌だよ——」泣く

皆々愁嘆の思入

剛……お父さん、明さんも雪さんも皆、家へ来て貰つて、藤子の命日を吊ふてやろうではありませんか、お母さんも何卒……雪さん、明さん、さア皆一緒に彼處に待せてある馬車へ乗つて邸に行つてくれ給へ」

安子明、汝、眞實に何ういふ氣で娘にぬれ衣を着せたのだ、私は尋常ぢや濟まされんよ」

明それを仰やると私はもう……何卒御存分になさつて下さいまし……何卒、伯母さん、伯父さん、貴方のお腹の癒えるやうに、何卒御存分に……と地に坐する。

剛君、もう廣止し給へ……お母さん、萬事後で分りますから私に任せて置いて下さいと云ふに……さア雪さん、明さんを連れて、守雄も一緒に皆彼所の馬車へ乗つて……お父さんも何卒、私は今、東郷さんの墓へ参つて後から直ぐ行きますから、明君、早く、雪さんも……

明「けれども私は……」

剛「行き給へど云つたら……」

雪「では兄さん……参りませう……」

岩「早く来い、汝、早く来ないか……」

送でも私は尋常ぢやア濟まされませんよ、あの明め、大切の一人娘へあられない疵を付けて、生命まで取るなんて……」
剛「宥めて」お母さん、全く一時の魔がさして、明君があんな手紙を寄越したのださうです、もう本人も悔悟して、殺してはくれと云つてるのですから貴方も何卒然ら仰やらずと許してやつて下さり」
安子馬鹿な事を仰い、人の娘を殺して置いて、そんな事で濟むものと思ふのか」

岩「早く来いと云ふに……早く来んか」

剛「お母さん、貴方もあんまり聽分がない、……何うせ人間は終ひには、皆こんな墓石になつて了ふんですもの、まだ墓石にならぬ中に、罪があつたら互に許し合ひ誤があれば堪へあつて、楽しく愉快に其日其日を暮して行くのが善いぢやありませんか、お母さん、さア何卒御一緒に、……早くね、私も今、後から行きますから……」

岩「眞實に剛さんの云ふ通りだ……来なさい、早く来なさい……あの子の

命日に、そんな執念深い事を思つたり云つてたりしてゐては佛の追善にも何にもなりませんぞ……」

安子……では参りませう、剛さんも早く歸つてお來よ」悄悄として行く、

剛 後見送つて、一邊には墓石許り、ア、私一人になつたのか……ツム眞實に氣が附いて見ると一人といふ者は寂しいもんだな、ア、藤さん、幾度思ひ返して見ても私が實に悪かつた、之も元はといへば、徒らに功名や官職に目が眩んで、婦の眞心から捧げてくれる愛情の難有味を知らなかつた、私は眞珠を捨て、泥を吸つてる豚の様なものだつたなア、その眞珠を二つまで私は砕いて了つたのか、藤さんはまア墓なりと残つてゐるが、綾江は……ア、あの綾江は何處の海の果へ流されて行つたやら……もうこの世界に眞心から私を愛してくれるものは、一人もなくなつて了つたのだ……」

東郷中將の墓前に立つて、

「東郷さん、鬼頭が参りましたよ……貴方は國家の功臣だが、矢張墓におんなすつたのねえ、生てる中に身を光らせてゐた肩書が今は何んだか貴方の肩の重荷の様に見えますよ……これにつけても人間とはつくつく不可思議なものではあるわい……」思入

○門附の親子三人連れ入り来る

破三味線の音「後にて園はうさ思ひ、かゝれとてしもぬばたまの、世のあぢけなさ身一つにむすぼれとけぬ片糸の、……」

父 此處等で淨瑠璃を始めても鑑一文にもなりはしねえんだ、ドレ、この墓所の蔭で、午飯にでも有附くべいか」

母 今日朝から景氣がよく、方々様で貰ひが多くて、眞實に嬉しい事だねえ」

子 父さん、己にあの卍をぬくれよ」

父 オ、今に遺る……さア、この丸太の上に腰を乗つけてないと衣服が汚れて了ふんだぞ」

母「今日は鮮も頂いて来るし、お錢が澤山取れたからお副食物も買つて来るし、御馳走だねえ……」

父「ウム、今日はいろく御馳走があるぞ、天道様ア人を殺さずだつて、眞實に難有い事ぢやアねえか」

子「お父さん辨當が人を殺さずだつて……こりやア辨當ぢやない、お鮮だよ」

父「ハ、ハ、鮮だつて矢張人を殺さずだ、さア食へく」

母「この子はまあ、あんなに喜んでるんだよ、旨けりや、皆食ふたが善いわ、口の邊へ一ばい飯粒つけてさ、ハ、ハ、ハ、ハ」

父「ウム旨いか、旨さうな口してるハ、ハ、ハ、ハ」

母「お父さん、さアこの魚の尻尻つて見なさい、旨いよ」

父「左様かく、汝の舐りかけなら尙更旨かるう、汝にはさアこの澤庵の切れ端を半分やるぞ、よく漬つてる」

「ア、お旨いく、オ、お父さん、あの角屋敷で何かお祝事とか云つてふれまつて貰つた正宗の鯛があつたけな」

父「オ、あるく、こゝにあるぞ、晩酌にせうかと思つたのだが、まア飲れく、命のある中に飲つてのけた方が心残りがなく善いのだ、さア、己が一つ毒味をするぞ、……ア、旨いく」口吞する

母「……ア、旨いく……何んだかお腹を痒ぐるやうだよ……」

父「ア、旨へく……」

子「坊にも些つと……」

父「あア、飲めく……」

母「私はもう酔つて来たんだよ」

父「飲んだ酒なら酔はずばなるめへ酔つた酒なら醒めずばなるめへ、否、その未だ酔の醒めぬへ中に一つ唄うかい……眞實に好い心持になつて来たぞ、一つ唄ふべし……さア、嬢引いてくれ、コラく……」と三味をひく。

様と苦勞すりや土橋の下も、

玉の臺ぢやないかいな、

母「お惚けだねえ、ようく、コラく……………」

○ 巡査「コヤく、何故其處で騒いぢよるのだ、そんな高歌放吟しちよつてはいかんがな、コヤく」

父「コヤく……………親は他國に子は島原に櫻花かやちりくくに」

巡「コヤく、本官を馬鹿にしちよるか、拘引するぞ」

始めて、心附いて吃驚「へいく、何うも相済みません、つい氣が付きませんでうつかり、何うもへい……………」

巡「貴様等は、私の制しちよるのを聞かんで、一體本官を馬鹿にしちよるから一應拘引する」

母「何卒……………御免なさつて下さいまし、決して悪氣のあつた譯では無いま

せんから……………」

子「何卒お巡査さん、父んを御免なさつておくんない、父んが警察へ引かれて行つたら、お母アも己等も飯食ふ事が出来なくなるだ……………」

巡「いかんく、一應拘引する」

剛「つかくくと進み寄り

「ア、コラく、別に悪意のあつた事とは見えないから、そのまゝ見道してやるが善かろう」

巡「これは怪しからん、本官が職務を執行するに敢て君等の干渉は受けない、一體君は何の権利あつて、左様な要らぬ世話を焼くんですか」

剛「何も然ら六ヶしく云ふ事はない、彼等が此處で歌を唄つた處がそれが何も他人の妨害になりはせんから、一應の説諭は兎に角、そんなに拘引

なんかするには及ばなからう」

巡「一體、君は小癪な、そんな事を云つて本官の職務に關して容喙する權

利があるか、黙つてすつ込んでゐるか善い、一體名は何んと云ふか、時宜に依つたら君も派出所へ同道を願ふぞ」

剛私に斯ういふものぢや」と名刺を差出す

巡査吃驚「へエー……アの、司法……司法大臣閣下……へ、これは何

うも……何うも誠に失禮を申し上げました、別に悪意あつて申上げたの

では決してムいませんから何卒御見道し下さるやうに願ひ上げます、何

卒その……へい、誠に何うも失言を致しました」

剛分りましたか、それでは汝等は今早く彼方へ行け」

門附誠に有難うございます……へい……」

剛オイ……一寸待て……」五圓紙幣一枚取出し「これを取つて置け……

又酒でも飲んで面白く唄ふたがよからう」

門へエ……あのこれを……御申談ぢやありませんか……」

剛取つて置けといふんだ」

門へエ……へエ……誠に何うも、地獄で佛とは旦那様の事でムいます……

……親子禮を述べて欣々として立去る、

巡「それでは失敬仕ります」舉手の禮して、悄悄と去る。

○剛、一行を見送りて

「藤子でも、綾江でも今一度生き返つて来てくれたら假令乞食をして

も……ア、己はアの乞食風情にも若かないのかなア、……もうく人

間の心を腐らすやうな内閣の存在は必要だ、辭職々々、辭職して綾江

の事も自首して出やう、もう断然辭職に決した」

(幕)

第九幕

(其一)築地慈惠病院受附の場

○看護婦、甲乙丙丁、

號外號外々々……號外々々」呼びつゝ紙片を投入して去る

甲「さア又號外が來ましたよ……それ、御覽なさい鬼頭司法大臣がとうと

う辭職して丁つて、國民黨内閣總辭職ですとさ、勝ちましたよ、鍋倉さん私等の豫言が當つてとう／＼内閣は總辭職……」

乙 鍋倉さんは司法大臣留任説の頑固なる主張者でしたが、これではいかな剛情な貴方でももう一言もなく降参なさいましよ」

丙 然うですとも、鍋倉さんのやうな頑固屋ももう頑固といふ鉄を投げ出して降参の外ありません、かねての約束ですから負けた方が勝つた方の命令通りを何んでも聽かなくてはなりませんよ」

鍋 眞實に意外だわ、まあ、貸して御覽」

甲 眼を三角にして御覽なすつたつて矢張り總辭職ですよ、斯うなつてはもう鍋倉さんも一言もありません」

乙 それでは何か奢らせませうか、お甘藷と云つては時候違ひだし、唐茄子は病院へは御禁制だし……」

丙 寧ろあの、新演劇でも奢らせませうかねえ」

鍋 口惜いねえ、鬼頭さん、剛さん、貴方は私をお欺しなすつたのねえ……」

……と聲色が、いり。

甲 、、、、あの、壹號室の患者の聲色ですか……よくそんな噂話を云つてゐましたかねえ、それでもこの二三日大さう気分が善くて、起直つてる様子ですが、除つ程もう衰弱して、脈なんか百幾つツて打つてるんですもの、院長さんのお話ではもう今日明日が六ッかしいのださうですよ、可哀さうでムいますことねえ」

乙 眞實にねえ、大川へ流されてゐて、もうあの儘海の方へ流はれて行く處だつたのを、院長さんが毎時夜更の御運動の、端艇を漕ぎに入らして、月の光で運よく見附つたもんだから引上げて連れ歸り、日頃から慈悲深い御方だからそれは、手篤い御介抱、眞實に感心でムいます事ねえ」

乙 何しろ體に負傷はしてゐたのだし、頭の骨が折れてゐるのだから一時はもうあの儘息を引取るのかと思つてゐましたに、漸く命を取止めて、今日では兎に角、口も利ける様うになるし斯ういふ經緯といふ事情が分つ

て親身の叔母も枕元に來てゐますし、假令今死ぬにしても戀がれぬいて
 のた男と一目でも逢ふて死ぬるのならこんなな幸はありませぬわねえ」
 鶴左様ですとも、叔母とやらいふ方も呼び寄せて介抱させてありますし、
 今日御手紙で、鬼頭大臣も追附け此處へ御見えになりませう」
 里イヤもう鬼頭大臣ではありませぬ、あの方が辭職なすつたから鍋倉さ
 ん敗北ですよ、奮つて貰ふといふのも何だか下卑てるし、それよりか鍋
 倉さんの十八番、寧ろあの改良劍舞でも見せて貰ひませうか」
 三よう、是非拜見させて貰ひ度いねえ」
 西幸、受附のやかまし屋の老爺も今見えなないし、院長様は、顯微鏡の御
 試験最中だし……」
 鶴あんまり、人を虐めるといふもんですわ」
 三人、いろく鞠める、
 鶴エツ、もう仕方がない……それでは淺草奥山へ洋航して學び得たる一
 流改良劍舞、これから一番やつけませうか、皆さんお嘩を願ひますよ」

○下駄、團扇など叩き合つて、看護婦一同拍子を取りながら唄
 ひ出す「そもく熊谷直實は、征夷將軍源の、頼朝公の近親にて、阪東
 一の旗頭……」鍋倉、はたきを持ち、妙な身振にて躍る
 受附の老爺、眼鏡を光らして出て來り、
 暫らく見てゐる中、つい笑顔になり「そもく熊谷直實は……」と唄ひ
 出して躍り廻る。
 ○剛、訪ひ來る。
 「御免……御免……」
 唄……花の粧ひ、薄化粧、鐵漿くろくとつけ給ひ……」
 剛御免……御免下さい……」
 皆々吃驚周章る、受附の老爺も周章て「皆さん何事です、こんな處で騒
 いでるといふ法がありますか、怪しからん……」叱言を云ひながら立出
 る、看護婦は皆逃げ込む
 名刺を差出して「院長に御面會願ひ度いですが……」

受贈貴方が鬼頭大臣様……へい、これはまあ善くこそ」と低頭平身
「何卒々々、此方へお上り下さいませ、早速院長へ相傳へまする」と退

○院長、米國人バルナバ博士出て来り

握手の禮

「貴方鬼頭さん、私バルナバ、手紙見てくれましたか、早く来て下され
まして難有う」

剛イヤ、委細は御手紙で承知しました、何うも私は實に意外でムいまし
て……もう死んだと計り思詰めておましたものが、貴方のお庇蔭で蘇生
つて居りませうとは實に意外で貴方の御信切は何と云つて御禮を申して
善いやら分りませぬ、難有うムいます……」

バルナバ「イヤ、皆神様の御恵、私の方であります綾江さんも私の説いて
聞かす事よく聞き分けられました大さう信仰の心が起りました、結構で
す、昔の事もう何とも思ひません、人間には罪も誤過もありますから、

貴方の事少とも悪いとは思つて居ません、却て自分が悪かつたと後悔し
てゐます、もし早くお知らせする筈でありましたが暫らく口利かせ
んで、事情少とも分らないでありました」

剛「エ、あの口が利かせんで……」

バルナバ「暫らく熱高くありまして、臆言許り云ふありました……病氣日本
でいふ破傷風、それに頭の骨折れて、脳骨折いふ大變危篤な容體ありま
す、至急に御呼び申ました」

剛「何から何まで容易ならぬ御心配をかけまして……そして病人はあの、
危篤でムいますか」

バルナバ「昨夜から何うも大變心臓の工合いけません、氣遣はしいです、貴
方何卒綾江さんの悪かつた事皆許して、優しく物云つて上げて下さい……
……安心して眠ります……病人安心して天國へ行きますから何卒信切に
物云つてやつて下さい」

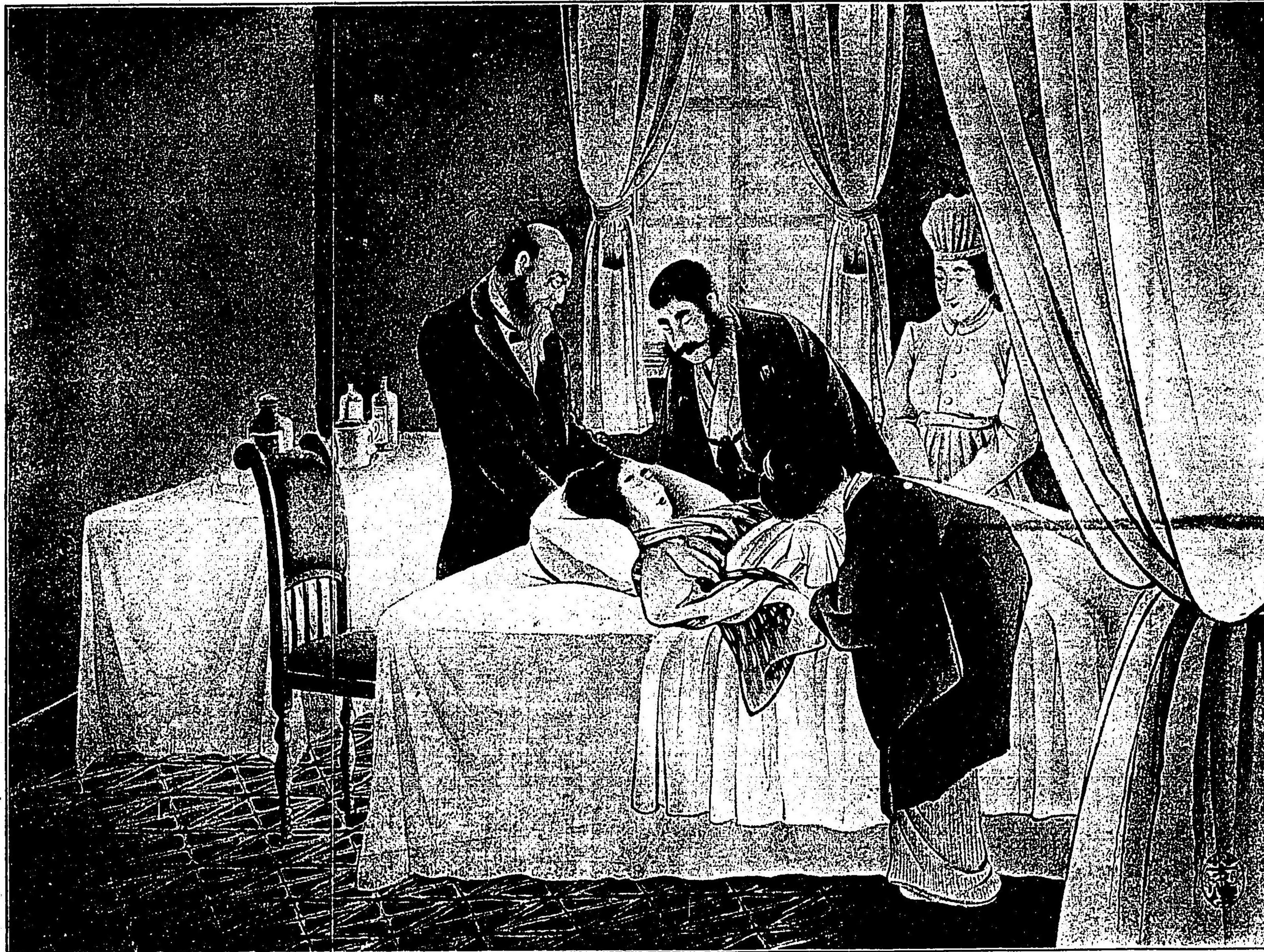
剛「イヤ、もう……皆私が悪かつたのです、彼は悪いどころか、思へば神

様のやうに信切な、愛情の深い女でした、何卒かして助かる工風はあり
 ませんでせうか、何んとか一つ……」
 パルナバ「誠に氣の毒……まだ若い人、私氣の毒でなりませんは何うももう
 助かる事難しく思ひます」
 剛ア、私は何んたる悪魔でゐましたでせう、他人の貴方さへ……外國
 から来て入らつしやる貴方さへそんなに御信切に……見ず知らずの他人
 をそんなにまで思つて、下さるに、私はまア……私はまア……と胸を
 押へて苦悶の體。
 パルナバ「何卒早く綾江さんに逢つてやつて下さり」

(其二)綾江臨終の場

○綾江、鹿野、看護婦

綾江、何卒氣分を慥かに持つてくれ、私は汝、官吏侮辱とか何とか巡



查にありもせぬ罪を着せられて、年老つた身が監獄の中へ入れられて了
 ひ、随分辛い目を見ましたが漸と許されて宿へ歸り、汝れ剛め、これか
 ら一番、汝の仇、私の恨を晴しに行かうと思つてた矢先、院長さんから
 の御手紙が来て死んだと思ふた汝がまだ此の世に生きてゐるのだと聞い
 た時の嬉しさと云つたらもう……」

甲「眞實にお察し申しますよ」

乙「さぞ吃驚なされたてゝいますね」

「吃驚とも、しやつくりとも、もう／＼狂氣のやうになつて駆けつけて
 見ると、……思ひの外、汝の容體が勝れないので、私はもう心配許り、

……何卒元氣を出して早く快くなつてくれないと、叔母さんは又一つ、
 苦勞が殖えたやうな氣がするんだもの、眞實に汝まだ、年は若いし、こ
 れから先が一花咲かす時だから何卒自分で氣を引立て、早く快くなつて
 くれよ、綾江頼むよ」
 綾江叔母さん、お老年の體で夜の日も碌々合はさないで御介抱して下さい

る、さぞお疲れてゐませうねえ……」
「何んの、何んの、そんな心配が要るもんかい、年は老つても叔母さんは何時も健康だからの」

「……眞實に何かから何まで私は貴方に御心配許しかけて済みません事です
ねえ、……御恩返しもしないでこのまゝ貴方より先へ死なねばなりませんのかねえ」

「コレ、それが悪い、そんな氣の弱い事を云ふて何うなるもんか、……
快くなつてくれ、何うしても快くなつてくれ、今汝が何う斯ういふ事があつては私は何樂みに此世に生きてゐられると思ふか、何うしても快くなつておくれよ」

綾江叔母さん……私、もう何うしても快くなりつこはありません、このまア手を見て下さい、瘦せてく……箸のやうてゐますもの……」
甲「そんなに氣を落しなされるには及びませんよ」
乙「眞實に、貴方そんなに、自分で快くならないなんて獨り定めになすつ

ては猶快くなりませんよ」

「……こんなに弱りましたは……亡くなつたお母さんの夢を見たり、お父さんの迎にお來なされるのが目に見えたりなんかするんですもの……剛さんは……剛さんはまだお出下さらないのですかねえ」

「オ、……もう來さうなもんぢやが薄情者だから何うするか知れたもんぢやアない……」

「叔母さん……あんな事をもうあんな事を仰やつて下さいますな……ねえ、叔母さん……剛さんは豪い方ですもの、私があんなに、一圓に昔の事を思ひつめて、困らせたのが悪かつたのでゐませう……もう一目……一目、此世で逢ひましたら私はこんな嬉しい事はゐいませぬ……安心して……安心して目を眠りますわ……」

○バルナバ博士、剛、入り來る
「バルナバ」綾江さん、剛さんが見えましたが、嬉しいか……嬉しくありません」

手巾を目に當る、

剛「……オ、綾江か……實に濟まなかつたなア……」手を握る、

綾剛さん……剛さん……よく出て下さいましたのねえ……」と縋り附いて咽び入る、

鹿野剛さん……綾江を少しは可愛さうだと思つてやつて下さい、あんなにまで邪慳にされて、まだ貴方の事を慕うて居るのですよ……」涙を拭く、

綾江叔母さん……もう何んにも云つて下さいませすな、剛さん……よく……よく来て下さいましたのねえ……」

剛「オ、……」
綾「私は眞實に、假にも貴方へ刃物を向けたりなんぞして、悪い事をしましたけねえ、……悪うございました……お負傷はなさらなかつたのですかねえ……」

剛「イヤ……もう、そんな事を云つてくれるな、……私は腸が断れるやう

だ」

綾「もう……もう、私はとても生きられません……院長様の御信切な手當で、まアこんなにも口も利けるやうにはなりましたが……何んだか體が私の物ではないやうな氣がしますもの……もう長く生きられません……」

剛「そんな氣の弱い事を云つてくれるな」

綾「否、これでもう死んでも心残はありません、生きてる中に唯つた一目でも貴方に逢つて御詫がしたいと思ふてゐましたが、……私の願が叶ふて嬉ういます……剛さん、堪へて下さいませ……私の悪かつたのは堪へて下さいませ……」

剛「イヤ、汝に悪い處は些ともない、皆私が悪い私があまり我意を通さうとしたから起つた事だ、これまでの事は何卒皆許してくれ、そして何卒も一度、健康になつて、今度は私と睦しく暮してくれんか」

綾「私は……私はもう死ぬのでいます……生きてたつてもう外に望はあ

りませんもの……貴方の奥さんに對しても私は今更氣の毒でなりません
 ……ねえ、先生、悔改めたら罪は消えて天國へ行かれますのねえ」
 パルナバ「ア、悔改めたら耶蘇様は皆お許しなさるあります……それ御安心なさるよろしい」
 鹿野「心細い事許り云つてくれるな、叔母さんは何うする、汝が先へ死んで了つたら叔母さんは何うするんだ」
 豊叔母「さんも、何卒許して下さいまし……剛さん……何卒奥さんと仲よく暮しなまつて下さいまし……けれどもねえ、死んで……天國へ行くつてからは貴方とね、……剛さん、天國では二人一緒に、元の夫婦になつて下さいませうねえ……善ムいますか」
 剛綾江「……その奥は……藤子はもう亡くなつて了つた、それも皆、私が悪かつたから起つた事、可哀さうな事だつたよ」
 豊「エ、奥さんが……奥さんが眞實に……それぢやア奥さんと私と二人、天國へ参りませう、もうもう仲よく暮しませうねえ……ア、奥さん、眞

實に私悪うムいました、何卒ね、お許しなまつて下さいましよ……」
 パルナバ「膽語あります……何んだか、脈大變いけません……」
 剛綾江「剛さんと貴方と私と三人、仲よくね、もうくこんな楽しい事はありませんよホ、……」
 剛綾江「く、氣を儘かに持つて居よ、綾江々々……」
 豊綾江「懺りして居よ……綾江、懺りして居てよ……綾江や、綾江ヤ……」
 豊剛さん「……剛さん……手を貸して……手を貸して、胸が切ない、切ない……貴方の手を握つたま、死度うムいますよ、放しちやいけません……放しちやいけません……」
 剛綾江「……も一度生きてくれんかいのう」
 豊綾江「……ア、院長さま、この娘は目を瞑ります」
 パルナバ「ア、可愛さう……ヤ、心臓麻痺あります……」黙靜してゐる
 綾江、儘と剛の腕を握りしめて絶息

奥、もう助かりませぬかねえ」
 剛綾江ッ……ア、何んだかすやくと眠つてゐる様だ、綾江、叔母さんの事は私が引受けたぞ、萬事安心して眠つてくれ、私はもうこれまでの剛ではない、汝や藤子が二人までも命を抛つて諫めてくれたのに感激して腹の底から新に生れ變つて人間らしい人間になるんだ、安心してくれ、何卒安心してくれ、……ア、振り返つて見ると我が戰場には愛の屍體が二つ横はつてゐる、この上もない悪戦をやつて来たものだなア、併し過去は神業でも改正する事は出来ない、唯、將來を深く戦ふのみだ……綾江安心してくれッ……」と耳へ口を寄せて叫びながら「ア、……何んだか笑顔をしてゐますよ、叔母さん、可哀さうな事をしましたかねえ」
 眞オ……眞實にこのやうな可哀さうな娘はありませぬよ」互に握手、愁嘆の思入、
 博士「綾江さん、肉體死んでも心死にませぬ、綾江さんの愛心、死に打ち勝ちました」

手を額に當て、讚美歌獨吟、

ちりのうさよを思ひ見ば

あだなる花の束の間に

散りてはかなくなるものぞ

獨りかはらぬ天つかみ

寶はたとへ山なすも

ほまれは高く輝くも

露の命のかひぞなき

まことのさちは天にこそ

渡る海原浪あらく

よるべなきさの捨小舟

高き殿の君ならで

たれか救はん世の民を

(大詰)

11/8/37

二八二

九 九

司法大臣 終

明治卅六年十二月廿九日印刷
明治卅七年一月一日發行

著者

中村吉藏

發行者

和田むね久

印刷者

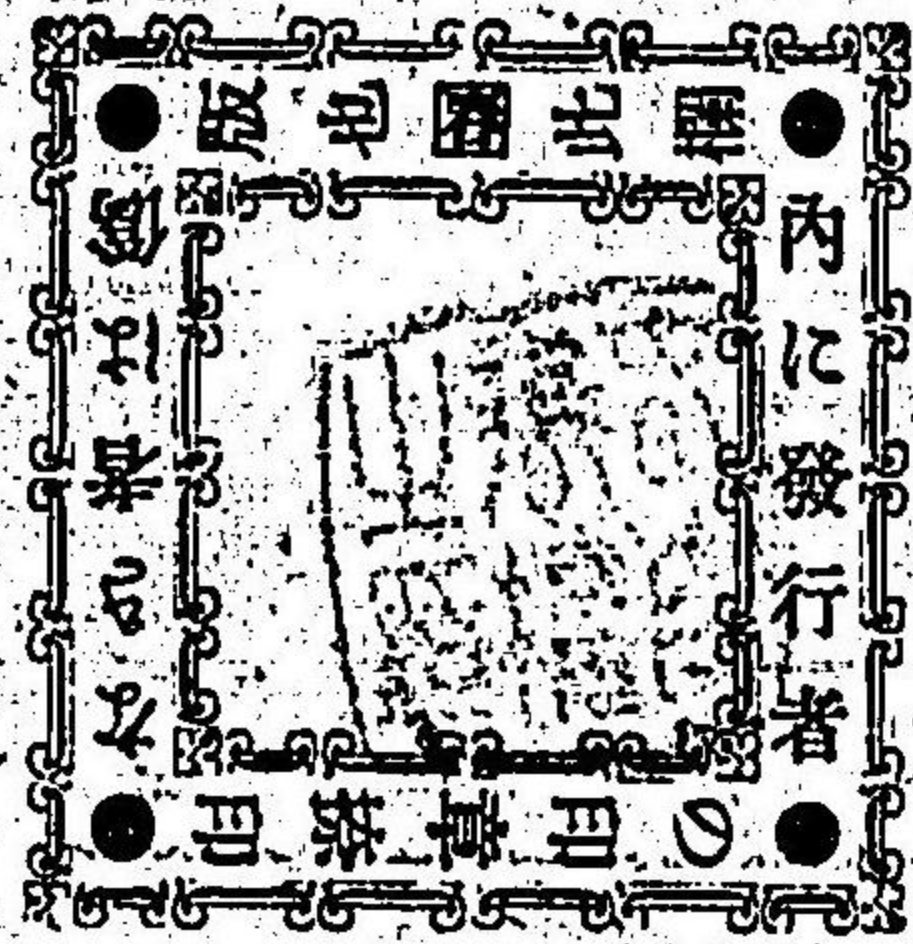
佐久間衡治

發行所

春陽堂

印刷所

英舍



司法大臣
實價金五拾錢

東京市日本橋區通四丁目五番地

東京市京橋區西紺屋町二十六番地

東京市日本橋區通四丁目角

東京市京橋區西紺屋町二十六番地

株式會社 英舍
(電話本局十八)

◎ 外宙藤後任主輯編 ◎

新小説

〔行發日一回一月毎〕

◎ 極彩色繪葉書每號二冊

新小説は小説を主とし文學、藝術、社會に有益の記事に富む日本第一の大雜誌なり。●本誌に執筆せらるる諸大家には紅葉、露伴、柳田山、天外、鏡花、風葉、曙山、春葉、秋濤、鶴伴、宙外其他十餘名あり

小説欄 には毎號長短數篇の作を新舊諸大家に起草を乞ひて之れを掲ぐ。●

雜錄欄 には高尚鉤玄の文と平易饒味の記事とを併載して上下一般の歡迎に背がざるべし。

時文欄 には宙外氏が公平穩健の筆を以て縱横に現時の文界を評論して餘さざるべし。

文苑欄 には諸名流の新體詩、美文等を採録し、傍ら寄書、米各國に於ける物や文の趨勢、思潮の張落、文士の動靜、著書の紹介を爲すべし。

海外文壇 には社會各方面に涉りて一代の名家を稱せらるる又此の以外、珍談奇聞をも掲ぐ。

譚叢欄 には全國の名所、奇蹟、傳説、口碑、俗語、俚歌、名物は、名人の逸話等を募集して掲載するもの。

諸國土産 には演劇、相撲、落語、講談、淨瑠璃その他百般の藝道に關する多趣味の記事を收む。

藝苑欄 には衣服、風俗、裝飾品の多趣味の記事を收む。●

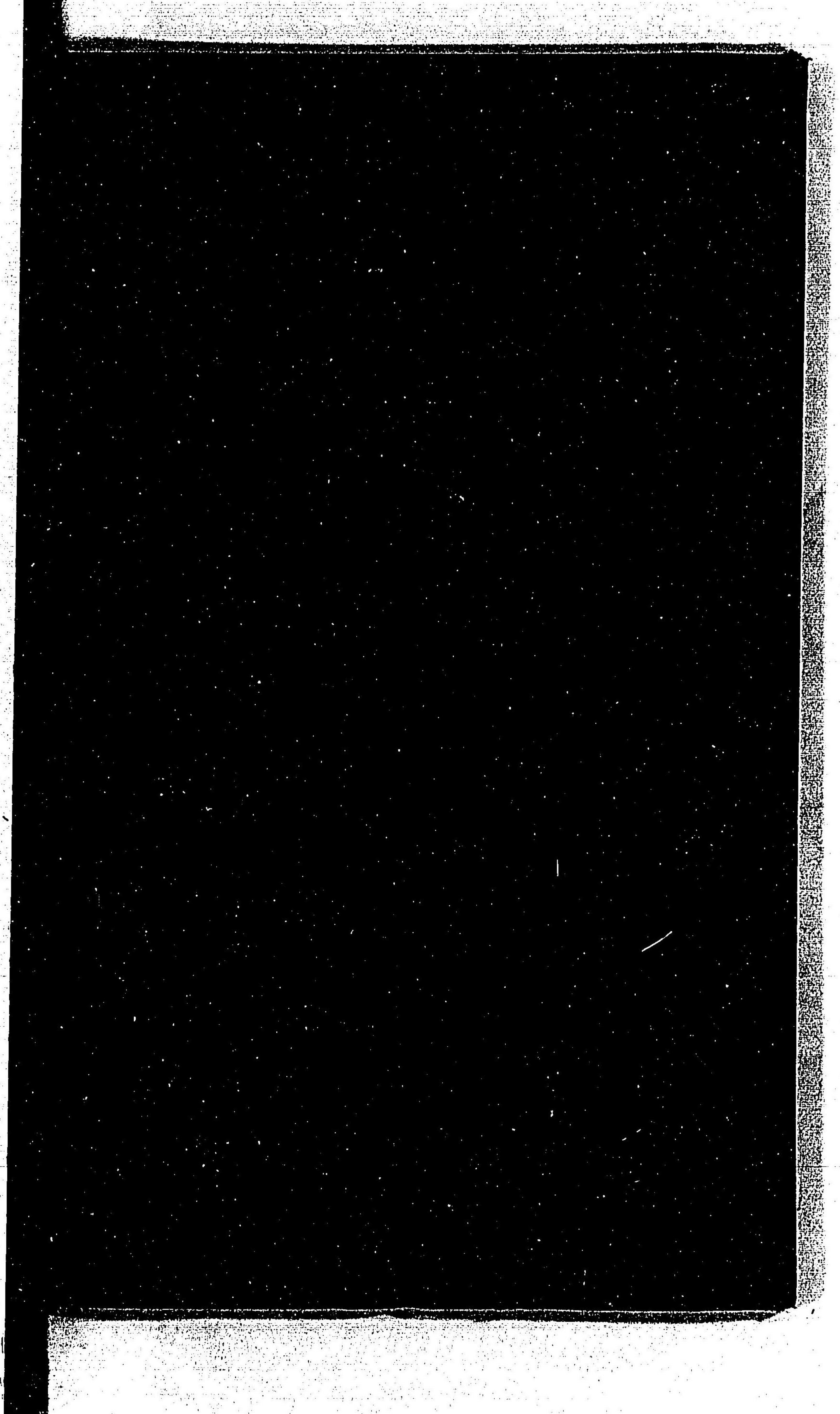
流行欄 には社會各方面の鋭利周到なる觀察記にして、ざるを補ふ。

社會欄 には社會各方面の鋭利周到なる觀察記にして、ざるを補ふ。

實價 一冊金貳拾錢、六冊金壹拾貳錢、十二冊金貳拾錢、郵税外ニ郵税一冊金貳錢郵券代用一割増

東京日本橋區本町四丁目五番 春陽堂 元

77
344



77
344

088865-000-9

77-344

司法大臣

中村 吉蔵/著

M37

DBK-0048



